長野市の埋蔵文化財第 166 集

松代城下町跡（5）

～代官町～

－グリンガルテン代官町分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2022 年 3 月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第 166 集として刊行いたします本書は、宅地分譲地造成工事に伴って実施した、松代城下町跡に関する調査報告書であります。

調査地は松代藩士の屋敷跡であり、貴重な文化財である主屋、庭園、腕木門が残されており、関係者が保存に向けた努力をしたものの解体に至りました。

発掘調査では、江戸時代後期の礎石跡等が発見されたほか、暦茶碗をはじめ、松代藩士の生活がうかがえる陶磁器等が出土しました。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いであります。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様、また、発掘作業に携わっていただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和４年３月

長野市教育委員会
教育長　丸山陽一

例　言　・　凡　例

1　本書は、令和２年度に分譲地造成工事に伴い記録保存を目的に実施された埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。

2　調査地は、長野県長野市松代町松代字代官町 1452 番１一部外に所在し、松代城下町跡に位置している。

3　発掘調査の実施については、事業主体者である中澤勝一建築株式会社からの委託により、長野市長加藤久雄が受託し、長野市教育委員会が直営事業として実施した。なお、調査は長野市埋蔵文化財センターが担当した。

4　埋蔵文化財の保護対象範囲は、開発事業面積 1672.40㎡全域である。このうち造成地内道路予定範囲である約 234㎡を発掘調査実施対象面積とし、実質調査面積は 210㎡である。

5　現地における発掘調査は令和２年４月９日から６月１日まで行った。

6　発掘調査から報告書の作成に至るまで、飯島哲也の指導の下、田中暁穂が担当した。執筆は飯島－第１章第１節、田中－上記以外、のように分担した。

7　調査で得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。遺跡略号は「ＭＪＧＤ」である。

8　発掘調査の実施に際し、委託者である中澤勝一建築株式会社におかれては、埋蔵文化財に対して深いご理解を頂き、多大なご協力を賜った。

9　基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系（国家座標）の第Ⅷ系（東経 138°　30′00″、北緯 36°00′00″）の座標値（日本測地系 2011）と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所に委託した。

10　掲載した地図は上が真北を、実測図等に掲載した方位は座標北を表す。掲載した図の縮尺は図ごとに記載し、個別遺構図は 1/60、遺物実測図は 1/3 を基本とした。掲載した遺構写真･遺物写真の縮尺は任意である。

11　遺構番号は発掘調査で付した通し番号を基本とした。遺構の略記号は以下の通りである。

礎石建物跡－ＳＳ　溝状遺構－ＳＤ　井戸跡－ＳＥ　土坑－ＳＫ　小穴－ＳＰ　性格不明遺構－ＳＸ

12　実測図において使用したトーンは各図に凡例を示した。また遺物実測図において一点鎖線は施釉範囲を表す。遺物観察表の凡例は、各表に付記した。

13　土層・遺物の色調記載は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に依拠した。

14　土器・陶磁器の編年は主に下記の研究に依拠した（数字は引用参考文献番号）。

肥前系陶磁　大橋康二・堀内秀樹・相羽重徳－①・⑥・⑫・㊱

瀬戸美濃系陶磁　田口昭二・藤澤良祐－⑱～㉔

京信楽系陶器　角谷江津子・畑中英二－⑨・㉞

備前系陶器　乗岡実－㉜

土器　両角まり－㊶

引用参考文献

①相羽重徳 2010「新潟県における近世擂鉢の流通 1（上越編）」『三面川流域の考古学』第 8 号　奥三面を考える会
②内田正男 1992『日本暦日原典』第 4 版、雄山閣
③江戸陶磁土器研究グループ 1992『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』 I
④　　同　　1996『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』 II
⑤ＮＰＯ法人夢空間松代のまちと心を育てる会 2004『庭園都市まつしろ　新しい松代が見えてくる－武家屋敷の庭園と町屋－』
⑥大橋康二 1990「いわゆる京焼風陶器の年代と出土分布について－肥前産の可能性があるものを中心として－」『青山考古』8　青山考古学会
⑦　同　1994『古伊万里の文様－初期肥前磁器を中心に－』理工学社
⑧　同　2002『別冊太陽　実物大そば猪口事典』平凡社
⑨角谷江津子 2016『近世京焼の考古学的研究』雄山閣
⑩神奈川大学建築史研究室 2009『松代城下町歴史的建造物調査報告書』長野市教育委員会
⑪北村保 1992「近世松代火難雑考」『松代』5　松代文化施設等管理事務所
⑫九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
⑬　　同　　2001『国内出土の肥前陶磁－東日本の流通を探る－』
⑭　　同　　2004『受容層の違いによる九州陶磁の様相』
⑮佐々木邦博ほか 2004「城下町の庭園と庭園を結ぶ水路の特性」『信州大学農学部紀要』40　信州大学農学部
⑯信州大学土木研究室 2015『松代城下町伝統環境調査報告書　－歴史的建造物編－』長野市教育委員会
⑰信州大学農学部造園学研究室 2015『松代城下町庭園調査報告書』長野市教育委員会
⑱岐瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006『江戸時代のやきもの－生産と流通－』
⑲　　同　　2012『瀬戸・美濃窯の近代－生産と流通－シンポジウム資料集』
⑳瀬戸市史編纂委員会 1993『瀬戸市史陶磁史篇』四（愛知県瀬戸市）
㉑　　同　　1993『瀬戸市史陶磁史篇』五
㉒　　同　　1998『瀬戸市史陶磁史篇』六
㉓瀬戸市歴史民俗資料館 1987『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VI
㉔田口昭二 1994「美濃窯の諸様相」『瑞浪陶磁資料館研究紀要』第 6 号　瑞浪陶磁資料館
㉕東京大学都市工学科大谷研究室ほか 1982『庭園都市松代　伝統的建造物群保存対策調査報告書』長野市・長野市教育委員会
㉖東部町教育委員会 1987『上の原遺跡群 III』
㉗長佐古真也 1996「江戸遺跡に流通する量産陶器碗の編年（Ver.2.1）」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』 II
㉘長野市教育委員会 2005『松代城下町跡～中木町・西木町・紺屋町～』長野市の埋蔵文化財第 109 集
㉙　　同　　2005『松代城下町跡（2）～殿町～』長野市の埋蔵文化財第 110 集
㉚　　同　　2006『松代城下町跡（3）～殿町～』長野市の埋蔵文化財第 114 集
㉛中村千賀ほか　2018「松代の武家屋敷　佐藤家庭園の植物相調査についての報告」『松代』32　松代文化施設等管理事務所
㉜乗岡実 2017「備前焼の徳利」『中近世陶磁器の考古学』7 巻　雄山閣
㉝日本風俗学会 1978『江戸時代食生活事典』雄山閣
㉞畑中英二 2003『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
㉟平凡社編 1988『別冊太陽　古伊万里』
㊱堀内秀樹 1996「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年的考察」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』 II
㊲　同　2001「関東地方（1）－江戸遺跡出土の肥前陶磁－」『国内出土の肥前陶磁－東日本の流通を探る－』九州近世陶磁学会
㊳森本伊知郎 2009a「貞享暦を記した陶器碗」『近世陶磁器の考古学－出土遺物からみた生産と消費－』椙山女学園大学研究叢書 35
㊴　同　2009b「東海道における近世陶磁器の流通」『同上』
㊵　同　2009c「威信材としての近世陶磁器」『同上』
㊶両角まり 1996「瓦質土器の分類について」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』 II

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　調査の経緯
　第１節　調査の契機と事務経過 ……1
　第２節　調査体制 ……4
　第３節　調査日誌抄 ……4
　第４節　遺跡の環境と屋敷地の変遷 ……5
第２章　調査成果
　第１節　調査概要 ……8
　第２節　遺構・遺物 ……10
　第３節　総括 ……14
図版
抄録
奥付

挿図目次

図１　敷地模式図 …… 2
図２　遺跡の位置と周辺の遺跡（縮尺 1/7,500） …… 6
図３　調査地位置図（縮尺 1/2,500） …… 7
図４　屋敷地の変遷 …… 7
図５　基本土層および調査区内の呼称 …… 8
図６　２・３・５次面全体図・検出面エレベーション図 …… 9
図７　ＳＳ１遺構実測図 …… 10
図８　ＳＳ２遺構実測図 …… 10
図９　ＳＳ３遺構実測図 …… 11
図10　ＳＳ４遺構実測図 …… 11
図11　ＳＳ５遺構実測図 …… 11
図12　ＳＥ１遺構実測図 …… 12
図13　ＳＥ２遺構実測図 …… 12
図14　ＳＤ１・２・ＳＫ２遺構実測図 …… 12
図15　ＳＤ３・４・６・ＳＫ３遺構実測図 …… 13
図16　ＳＸ１遺構実測図 …… 13
図17　暦推定復元図 …… 14
図18　遺構配置想定図 …… 16

挿表目次

表１　遺構観察表 …… 10
表２　木製品観察表 …… 13
表３　銭貨観察表 …… 14
表４　土器・陶磁器・瓦・ガラス製品観察表 …… 17～20

第１章　調査の経緯

第１節　調査の契機と事務経過

長野市の南部に位置する松代地区は、松代城跡をはじめとして武家屋敷や町屋、泉水路などの情緒豊かな歴史的街並みをいまなお色濃く残す、真田十万石の城下町である。

これらの歴史的資産を遺し活かすため、長野市及び長野市教育委員会（以下、市教委）としては、1981（昭和 56）年に伝統的建造物群保存対策調査を行い、「庭園都市」「泉水路」としての価値付けを行った。1983（昭和 58）年には松代三町伝統環境保存計画策定調査を実施し、同年制定された長野市伝統環境保存条例（以下、条例）に基づき、保存区域として表柴町・代官町・馬場町の三町を指定した。2002（平成 14）年には竹山町を加え四町とし、その年から 2008（平成 20）年にかけて伝統環境保存調査を行い、建造物や庭園について報告書をまとめている。保存対策事業としては、1981（昭和 56）年から着手した松代城跡の復元整備や、旧文武学校・真田邸の保存修理などを継続的に進めている。また、条例に基づき伝統環境を保存するための補助金制度を 1984（昭和 59）年から実施し、同年から 1991（平成 3）年まで泉水路活性化事業も行ってきた。

今回の開発事業地（長野市松代町松代 1452 番１一部外）は、武家屋敷が建ち並ぶ代官町に位置しており、敷地内には 1984（昭和 59）年に条例に基づく保存対象物に指定された主屋等が現存していた。前土地所有者からの申請に基づき、門の修理や塀の復元等に対してこれまでに 1985（昭和 60）年、1992（平成 4）年、1998（平成 10）年の３回、市教委からそれぞれ補助金が交付されている。

長野市埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）あてに、当該地における埋蔵文化財の取り扱いに関する照会があった初源は 2017（平成 29）年９月８日に遡る。前土地所有者から依頼を受けた開発業者によると、主屋や門を解体して５区画の分譲地を造成する計画とのことで、文化財保護法（以下、法）第 93 条第１項の規定に基づく届出が必要と回答し、伝統環境保存区域内での開発行為ということで市教委文化財課とも協議を行うよう指示している。同年 12 月 11 日に文化財課と前土地所有者との話し合いの場が持たれ、「管理が行き届かず、近隣から苦情もあり、将来引っ越すために宅地分譲で土地を処分したい。もしも宅地分譲せず現状のままで買いたいという人がいれば売ってもよい。」とのことであった。本人の承諾に基づき地元松代町の商工会議所に情報提供したところ、同年 12 月 27 日と翌年１月５日に商工会議所から土地購入希望者を紹介されたようであるが、

写真１　主屋（東から）

写真２　庭園（北から）

金額面で折り合いがつかなかったらしい。また、事前に庭園の記録保存を目的とした植物相調査の実施についても承諾していただき、同年10月から翌2018（平成30)年6月にかけて実施できたことは幸いであった。

その後、2018（平成30）年1月9日付で条例第7条第1項の規定に基づく「長野市伝統環境保存区域内行為届出書」（分譲地造成計画）が前土地所有者から提出され、また同月15日付で開発業者を通じて法93条第1項の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」が理文センターに提出された。同年2月16日には長野市伝統環境保存審議会が開催され、本件の行為届に関して審議された結果、条例第7条第2項に基づく2月27日付29文第447号「長野市伝統環境保存区域内における行為について（勧告）」（意見書添付）が勧告され、3月5日に文化財課長が前土地所有者本人に直接手渡している。1月19日には松代地区住民自治協議会（以下、住自協）から地区の宝として保存を希望する旨の要望書が前土地所有者に提出されるなど、主屋や庭園の現状保存を望む声は決して小さくなかったが、個人が歴史的建造物を維持管理することの限界を理由として掲げられ、前土地所有者の翻意を促すまでには至らなかった。しかし、法第93条第2項の規定に基づき、同年1月29日付29理第2-258号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」により市教委から保護措置（その他、発掘調査）を指示し、その後盛土による遺構面の保護や発掘調査の実施等について協議を重ねたところ、開発業者としては分譲地造成計画を断念することに至り、同年4月17日に法93条の規定に基づく届出取り下げの連絡を受けている。

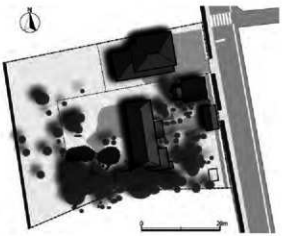


図1　敷地模式図

しかし、前土地所有者は諦めておらず、開発行為の実行に支障となる主屋や庭園を自営工事によって取り除くという強硬策を採ったのである。前土地所有者から直接依頼を受けた解体業者が2018（平成30）年6月13日に塀の解体工事に着手したことから理文センターが現地で確認したところ、塀の一部を解体し、庭園を更地化（植栽樹木の伐採・抜根、池・泉水の埋戻し、景石・ご鎮守等の撤去など）する作業を実施するとのことであった。翌14日、理文センターから解体業者に対して法93条の届出を施主である前土地所有者から提出するよう指導し、かつ提出しないのであれば法に抵触しないよう注意喚起を行った。しかし、前土地所有者から法第93条の規定に基づく届出はなく、やむを得ず6月19・20・27・29日、7月2・6・9日に埋蔵文化財パトロールを実施し、埋蔵文化財破壊の有無について監視した。パトロールの結果、明確な埋蔵文化財の破壊は確認できなかったものの、本来は法93条の規定に基づく届出が提出されるべき案件と判断されることから、同年8月6日付30理第100号「埋蔵文化財保護に係る法令の遵守について（通知）」により遺憾である旨の通知を前土地所有者あてに送付するとともに、長野県教育委員会に対し情報提供を行った。

主屋の解体工事が始まったという情報を2018（平成30）年11月2日に文化財課の担当者から受け、即座に現地を確認したところ、まずは表門の上屋部分のみの解体工事であった。ちなみにこの表門は、茅葺の腕木門として歴史的価値が高いものと評価され、滅失を憂えた地元住自協が搬送費用を負担し、長野市に寄贈する形で保存されることとなったものである。続く主屋の解体工事に先立って、改めて前土地所有者に対して法第93条第1項の規定に基づく届出を提出するよう依頼し、同月6日付で前土地所有者より「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」が提出された。市教委からは同月9日付30理第2-208号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」を前土地所有者あて通知し、保護措置として工事立会を指示している。その後

本格的に主屋の解体が開始され、埋文センター職員が11月5日及び12日に工事立会を行い、11月14日付30埋第4-54号「埋蔵文化財保護に係る工事立会いの結果について（通知）」により、埋蔵文化財の包蔵を確認したものの工事による埋蔵文化財の影響は軽微であったことを前土地所有者あて通知した。

写真3　表門（東から）

開発行為の実行に支障となっていた主屋・表門の解体と庭園の更地化が終了したことで、前土地所有者は分譲地造成計画を新たな開発業者に依頼した。今回の開発事業の主体者である中澤勝一建築株式会社（以下、事業主体者）から、法第93条第1項に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」が2019（令和元）年10月7日付で改めて提出された。上述の経緯と併せて書類上の不備もあり、市教委としては受付を保留しながらも、綿密な保護協議を継続することになる。開発計画の一部を見直し、いくどか設計変更を求める中で開発事業区域全体1,672.40㎡を保護対象範囲とし、開発道路部分約234㎡については記録保存を目的とした発掘調査対象とし、宅地・その他部分は盛土を施して現状保存することとなった。2020（令和2）年3月5日付で事業主体者より「発掘調査依頼書」と「土地所有者承諾書」が提出され、同年4月1日付で、市教委より事業主体者あてに2埋第2-76号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」を通知し、保護措置として発掘調査を指示した。そして4月2日付で市教委と事業主体者の間で「埋蔵文化財の保護に関する協定書」が締結され、4月6日付で長野市長と事業主体者の間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」が締結された。

発掘調査は2020(令和2)年4月9日から6月1日までの54日間で、実質調査面積は210㎡である。調査終了後、長野県教育委員会教育長あてに同年6月8日付で2埋第59号「発掘調査終了報告書」を、法第100条第2項に基づき、長野南警察署長あてに2埋第60号「埋蔵文化財の発見について（通知）」を提出し、事業主体者あてには同日付2埋第58号「発掘調査現場作業の終了及び引渡しについて（通知）」を通知した。令和2年度の発掘調査委託は2021（令和3）年3月10日付で変更され、同月12日付で完了した。令和3年度に整理調査を行って2022（令和4）年3月に本書を刊行し、すべての保護措置を終了した。

第２節　調査体制

本調査は、起因となる開発事業の主体者と長野市長との委託受託契約に基づき、長野市教育委員会の直轄事業として実施し、長野市埋蔵文化財センターが担当した。その組織は以下のとおりである。

調査主体者　長野市教育委員会　教育長　近藤　守（令和２年度）
　　教育長　丸山 陽一（令和３年度）
統括責任者　長野市教育委員会　教育次長　樋口 圭一
統括管理者　長野市教育委員会文化財課　課長　小柳 仁彦（令和２年度）
　　課長　前島　卓（令和３年度）
調査責任者　同　文化財課埋蔵文化財センター　主幹兼所長　大井 久幸
調査担当者　同　文化財課（埋蔵文化財センター担当）　課長補佐　飯島 哲也
　　課長補佐　風間 栄一（令和３年度）
調査機関　長野市埋蔵文化財センター
　　庶務担当　係長　小林 晴和（令和２年度）
　　事務職員　宮本 博夫、平林満美子
　　調査担当　係長（学芸員）　風間 栄一（令和２年度）
　　主事（学芸員）　小林 和子
　　研究員　田中 暁穂（主任調査員）、清水 竜太、遠藤恵実子（令和２年度）、篠井ちひろ、小野 涼香、井出 靖夫、伊藤 愛（令和２年度）、千野　浩（令和３年度）
発掘調査員　向山 純子
発掘補助員　後藤 大地
発掘作業員　板倉 君子、関崎 文子、成澤 廣志、早川壮幸、三井 邦夫、宮澤利忠、村井 義博、室賀 政貴、山岸 重子、山崎 孝之
整理調査員　青木 善子、市川ちず子、鳥羽 徳子、武藤 信子（令和２年度）、半田純子（令和３年度）
整理作業員　飯島 早苗、清水さゆり、西尾 千枝、待井かおる、三好 明子、宮島 恵子
測量業務委託　株式会社写真測図研究所　代表取締役　湯本 和幸
重機等現物提供　中澤勝一建築株式会社（本体工事請負業者：長野特建株式会社）

第３節　調査日誌抄

発掘調査は 2020（令和２）年４月９日（木）から開始しした。

４月　９日（木）　除草し表土を除去し、深さ５㎝まで掘削したが、既存建物の痕跡は検出できなかった。
　13 日（月）　降雨により現場作業は中止。
　15 日（水）　表土面の全景撮影、１次面高を確認するためトレンチを掘削した。
　16 日（木）　表土面の測量を行う。またトレンチを主屋周辺で深さ約 40㎝まで掘削して下層確認を行った。
　20 日（月）　重機により１次面を検出、調査区中央付近に残存、その他を２次面まで掘削した。

22日（水）　２次面の調査に入る。遺構精査を行う。

27日（月）　～５月６日（水）　新型コロナ予防対策のため現場作業は一時中断。図面整理などを行った。

５月 7日（木）　現場作業を再開し、１次面の遺構測量、西部のトレンチ掘削などを行った。

8日（金）　重機により１次面の除去及び東部駐車場の解体を行い、並行して遺構の調査も継続した。

1日（月）　駐車場跡の２次面精査に入り、調査区東端の屋敷地塀の痕跡、石組溝を検出した。塀は近代以降の構築、石組溝も近代に修復されていた。この他、ＳＥ１･ＳＫ２など近代遺構が発見された。

12日（火）　２次面全景撮影を行い、３次面を検出した。

15日（金）　造成工事開始に伴い場内の排土整理等が行われるため、準備作業をする。

18日（月）　建物跡以外を５次面まで重機掘削。

19日（火）　３次面建物跡周辺の遺構測量。その後人力により検出面を下げていく。

25日（月）　～28日（木）　重機を投入して、５次面を完全に検出した。これにより、調査区西端にＳＸ１を検出し、５次面の遺構調査を集中して行った。

29日（金）　空撮・遺構測量を行う。

６月１日（月）　図面作成等を行い、器材を撤収して現地での作業を完了した。

遺構測量

調査風景

第４節　遺跡の環境と屋敷地の変遷

調査地は松代城下町跡の南部、代官町に所在する。松代城下町跡は真田十万石松代藩の城下町で、三方を東部山地などの山に囲まれ、神田川・蛭川・藤沢川によって形成された複合扇状地上に位置する。扇状地は北で千曲川の氾濫原に接し、複数の河川が合流する地形は頻繁な洪水をもたらした。1742（寛保２）年に発生した千曲川の洪水、「戌の満水」後に、城の北に接していた千曲川が現在の位置に瀦替えされた。近年では神田川の放水路掘削や蛭川・藤沢川合流地点の上流移動などの河川改修が行われた。一方で豊富な地下水により水道や泉水路が張り巡らされ、城下町の生活を豊かにしてきた。現在まで松代城下町跡の範囲では近世以前の遺跡は発見されておらず、松代の原始・古代の遺跡は松代町の周縁に展開している。

松代城は 1560 年頃武田信玄が川中島合戦の拠点として築いた海津城を前身とし、1622（元和８）年に真田信之が移封されて以後は松代藩主真田氏の居城となった。1981（昭和 56）年に国史跡に指定され、整備復元のための発掘調査は 1983（昭和 58）年から断続的に行われている（1）。同じく国史跡に指定されている新御殿跡（10）でも整備に伴う調査が行われ、神田川放水路掘削では城郭の外堀の調査（3）、城郭南西に位置する花

の丸の調査（9）なども行われている。

城下町は武家地である殿町・片羽町・清須町・代官町・馬場町・御安町・柴町・竹山町、町人地である町八町（馬喰町・紙屋町・紺屋町・伊勢町・中町・荒神町・肴屋町・鍛冶屋町）と町外町からなり、現在の町並は城下町のそれをほぼ踏襲しているが、近年の開発により次第に変化している。松代城下町跡における最初の調査は国道 403 号線改良工事に伴うもので（以下、木町通り地点）、主に街道沿いの建物や水道施設、火災痕跡などが明らかにされた (5)。上級武家地であった殿町・片羽町では八十二銀行地点 (7)・松代病院地点 (8)・長野信金地点 (14) の調査が行われ、蔵などの建物跡や泉水路、木簡などが発見された。本調査地点であるグリンガルテン代官町地点 (13) は江戸後期から幕末の中級武家地の調査である。このほかの近世の遺跡としては、松代焼窯跡があり、城下町跡の中では荒神町窯・原窯跡・代官町窯跡が築かれている。このうち代官町窯跡 (12) は松代焼で唯一発掘調査が行われた窯跡である。

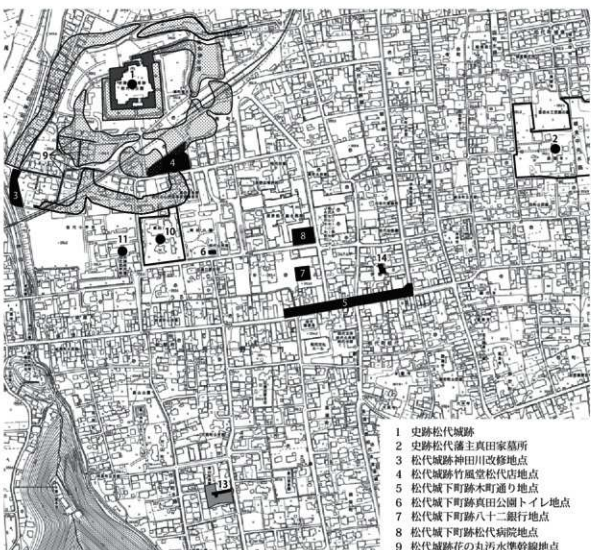


図 2　遺跡の位置と周辺の遺跡（縮尺 1 ／ 7,500、平成 24 年長野市都市計画図に加筆）

調査地は近世に中級藩士が集住する代官町に位置し、保護対象範囲 1,672.40㎡は松代藩士佐藤家の屋敷地の約 3/4 を占める。絵図・古文書によれば屋敷地はもとは南側の土地も含めた 737 坪が牧野伊左衛門の屋敷地であった（「家中屋敷絵図」、菅沼資料、真田宝物館蔵）。「監察日記書抜」に 1759（宝暦 9）年に火事で全焼したとあり、「浦野家文書」には 1760（宝暦 10）年に佐藤軍治が牧野伊左衛門の跡屋敷のうち北の 350 坪を与えられたと記載される。家中屋敷絵図でも 18 世紀初頭の絵図では牧野伊左衛門、18 世紀後半では敷地の北半に佐藤軍治、南東に 2 軒の敷地、南西に空閑地が描かれる（図 4）。これ以降佐藤家の敷地は現在までほぼ変わりなく継承されている。今回の調査では牧野家段階の火災痕跡は不明瞭であったが、その他の記録に残る 1788 年（天明 8）の河内屋火事、1799（寛政 11）年の佐藤家単独の火災、1872（明治 5）年の長国寺の火災については調査で確認された。

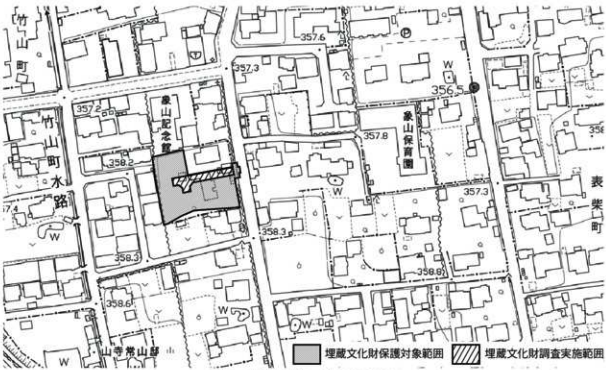
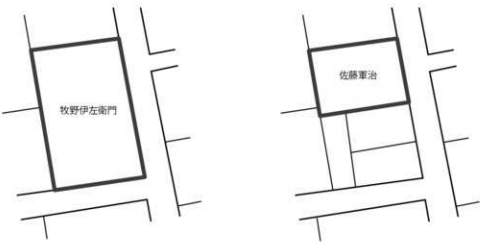


図 3　調査地位置図（縮尺 1/2,500）



18 世紀初頭　家中屋敷絵図
（菅沼資料、真田宝物館所蔵）

18 世紀後半　松代城下町図
（吉 204 文書、真田宝物館所蔵）

図 4　屋敷地の変遷（家中屋敷絵図・松代城下町図をトレース）

第２章　調査成果

第１節　調査概要

屋敷地内を復元するために旧地表面の検出を試みたが既存建物の痕跡はみられず、主屋周辺は解体時に攪乱されていた（0 次面）。しかし既存建物の記録、建物解体時の基礎痕跡や攪乱の位置などから、主屋北西に建物が附属する構造と想定され、主屋・西棟と区分した（図 5）。1 次面は西棟北部に焼土や散乱する石礫が検出されたが、その他は遺構はなく続けて 2 次面を検出し、主屋・西棟の範囲で溝状遺構・土坑・小穴を検出した。3 次面は西棟にのみ遺構が検出された面で、土層断面で火災後整地層や被熱面により分層し小穴を検出したが、最終的には 2 次面との分別はできず、本報告では 2 次面の中に吸収した。調査区東端は駐車場として使用されていたが、2 次面で調査に入り、屋敷塀の基礎や石組溝など幕末から近代の遺構が確認された。調査区西部では蔵が所在した範囲は攪乱され、その他も遺構は検出されなかった。調査区は東入りの屋敷地内の門より北に東西に設定され、東から前庭－井戸－主屋－西棟－蔵－農地を貫いていると想定された（図 6）。しかし調査区東西は中央と比べ出土遺物が若干新しかった。2 次面調査時に検出面の誤認に気づき、5 次面で東西の検出面を中央より低く設定した（図 6）。4 次面はトレンチの土層などに部分的に確認されたが、検出面や遺構を確認できなかったため、本報告では削除した。5 次面では西棟範囲西端で溝状遺構 3 条、蔵想定範囲で建物跡、調査区西端で畝状の性格不明遺構を検出した。主屋範囲では建物跡を 2 棟検出し、調査区東部では井戸跡 2 基を確認し、そのうちＳＥ 1 は近代以降の遺構であった。検出面の設定変更により遺物の取上げと検出面には齟齬が生じたが、整理調査時にその修正に努めた。また遺構についても調査時の検出面と本書の検出面が異なるものがあるが、土層の解釈と出土遺物の年代観により適宜変更したものである。検出面の所属時期は 1 次面を幕末～近代、2・3 次面を 18 世紀後半を中心とした 18 世紀代、5 次面を 17 世紀後半から 18 世紀中葉と判断した。図 6 では調査時の遺構検出状況を示し、図 18 では土層解釈、出土遺物の年代観により決定した土地利用の変遷を示した。

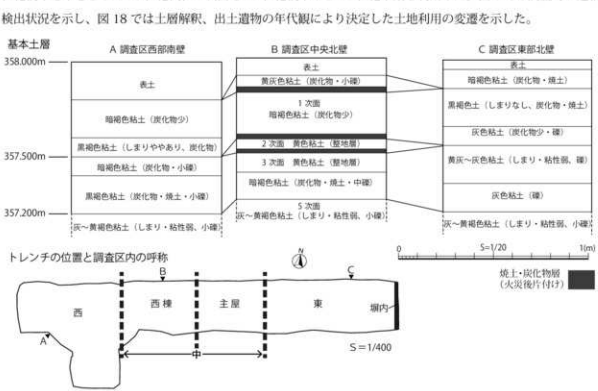


図 5　基本土層および調査区内の呼称

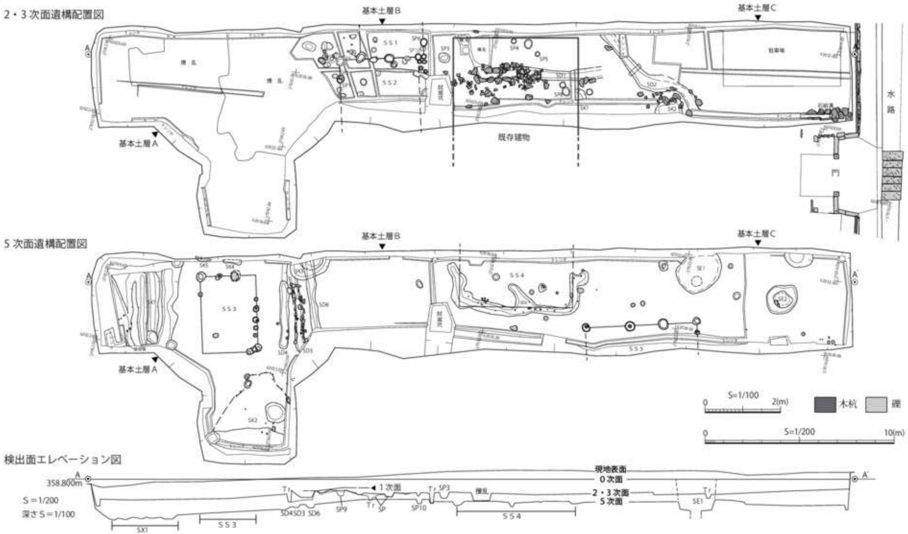


図6　2・3・5次面全体図・検出面エレベーション図

第２節　遺構・遺物

遺構は礎石建物跡５棟、溝状遺構６条、土坑５基、井戸跡２基、性格不明遺構２基、小穴を検出した。詳細は遺構の観察表に記載した（表1）。小穴は遺物が出土した遺構にのみ番号を付した。

礎石建物跡（ＳＳ１～5、図７～11）

礎石建物跡とした遺構はＳＳ４を除き小穴として検出したものである。それらの小穴は浅いものが多く、礎を据えていたと推測される。ＳＳ１は２次面西棟部分で確認され、東西２間、南北は調査区北壁よりさらに北に延びて、２間以上になると推測される。南辺はＳＳ２と重複する部分があり、一体の建物とも考えられる。ＳＳ２はＳＳ１と重複する北辺が２間、西辺が２間以上ある。南は調査区外へ続く。ＳＳ４はＳＤ５として調査したが、溝の底面中心に木杭が打設され、沈下防止の基礎としていた可能性がある。また溝状遺構としては上端に凹凸があり、直線的でないことから、礎を基礎とした礎石建物と考えた。ＳＳ５も小穴の底面に木杭の痕跡と推測される小孔があり、同様の構造である。

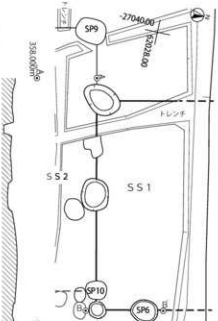


図７　ＳＳ１遺構実測図

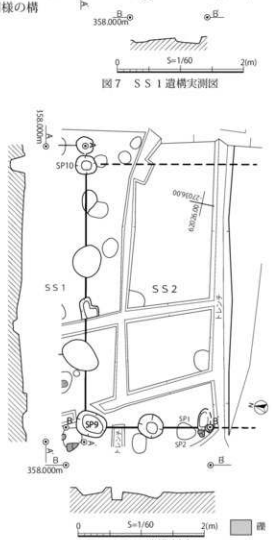


図８　ＳＳ２遺構実測図

調査面	遺構名	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備　考
2	SD1	(676.4)	48.3	5.0	石組溝,18Ｃ後半
2	SD2	(614.5)	57.4～90.4	15.8	石組溝,18Ｃ後半
5	SD3	(382.1)	40.2	8.1	石組溝,18Ｃ前～中
5	SD4	360.4	48.2	8.1	18Ｃ前～中
5	SD5(SS4)	678.5	短軸248.2 幅44.2～102.5	5.1～11.1	木杭,18Ｃ前～中
5	SD6	(354.4)	41.2	11.0	18Ｃ前～中
2	石組溝	(272.6)	内法15 掘方58.9	18.2	コンクリートによる 補修,幕末～
2	SK1	(55.6)	(55.2)	6.6	18Ｃ～
2	SK2	144.0	(74.0)	81.7	近代
5	SK3	214.5	(83.2)	37.9	18Ｃ前～中
5	SK4	98.0	(17.8)	5.0	18Ｃ前～中
5	SK5	85.6	(19.5)	5.0	18Ｃ前～中
5	SX1	(393.6)	(344.0)	14.5	底状,木杭,18Ｃ前～中
5	SX2	(388.0)	(375.0)	12.0	木杭,18Ｃ前～中
5	SE1	掘方246.1	掘方198.8	(36.0)	近代
5	SE2	掘方161.1 内径103.8	掘方149.8 内径103.5	(34.0)	18Ｃ～19Ｃ前半
2	SP1(SS1)	40.4	37.5	11.0	18Ｃ後半
2	SP2(欠番)	—	—	—	SP1と同一
2	SP3	57.9	50.7	16.4	18Ｃ後半
2	SP4	28.9	26.6	4.8	18Ｃ後半
2	SP5	26.4	24.2	7.8	18Ｃ後半
2	SP6(SS1)	43.9	36.8	10.0	18Ｃ後半
2	SP7(欠番)	—	—	—	
2	SP8	47.7	37.6	5.0	18Ｃ後半
2	SP9(SS2)	48.8	38.4	12.3	18Ｃ後半
2	SP10(SS1)	36.6	32.2	22.0	18Ｃ後半
2	SS1	3.32m	(1.56)m	—	18Ｃ後半
2	SS2	4.18m	(2.33)m	—	18Ｃ後半
5	SS3	3.87m	2.94m	—	18Ｃ前～中
5	SS4	4.18m	(2.33)m	—	18Ｃ前～中
5	SS5	4.18m	(2.33)m	—	18Ｃ前～中

表１　遺構観察表

井戸跡（ＳＥ１・2、図12・13）

ＳＥ１は近代以降の井戸と位置が概ね一致し、出土遺物も近代の遺物が出土した。ＳＥ２は18世紀の陶磁器、木製箸などが出土した。いずれも完掘はしていない。

溝状遺構（ＳＤ１～４・６、図14・15）

溝状遺構はＳＤ１～３が石組溝であるが、その他も形態から石組と考えられる。ＳＤ１・２は２次面の遺構で、覆土に焼土と炭化物を多量に含むため、火災後の整地で埋没したと考えられる。出土遺物から18世紀後半の所産とみられる。ＳＤ３・４・６は５次面で南北方向に並行して検出され、西棟から調査区東部に傾斜する位置にある。焼土と炭化物を多量に含み、火災後の整地により埋没したと推定され、18世紀前半から中葉の遺構と考えられるが、同時に存在したかは不明である。またＳＤ３・６は北部でＳＫ３と重複するが、新旧関係は不明である。

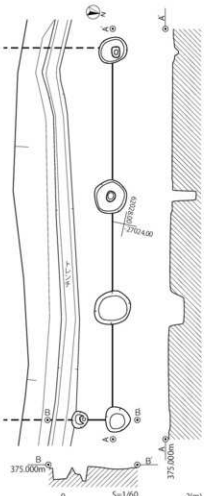


図11　ＳＳ５遺構実測図

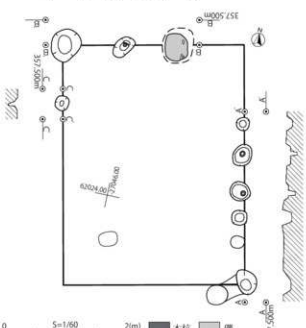


図９　ＳＳ３遺構実測図

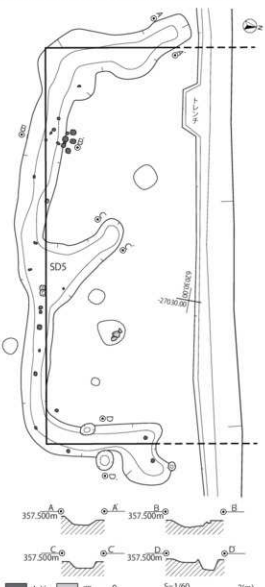


図10　ＳＳ４遺構実測図

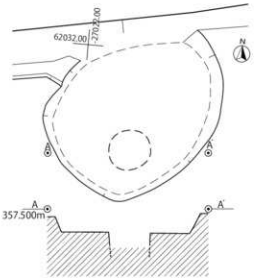


図12　ＳＥ１遺構実測図

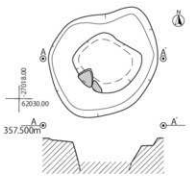
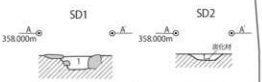
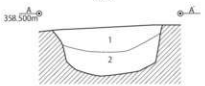


図13　ＳＥ２遺構実測図



ＳＤ１　1.黒色 2.5Y 2/1 粘土 粘性あり。しまり弱。小礫・焼土・炭化物多

ＳＤ２　1.黒色 2.5Y 2/1 粘土 粘性・しまりあり。小礫・焼土少。炭化材。



1.黒褐色 10YR3/1 粘土 粘性あり。しまりやや弱。小礫・遺物・炭化物少。
2.黒褐色土 10YR3/1 粘土 粘性・しまりあり。小礫多。遺物やや多。炭化物少。

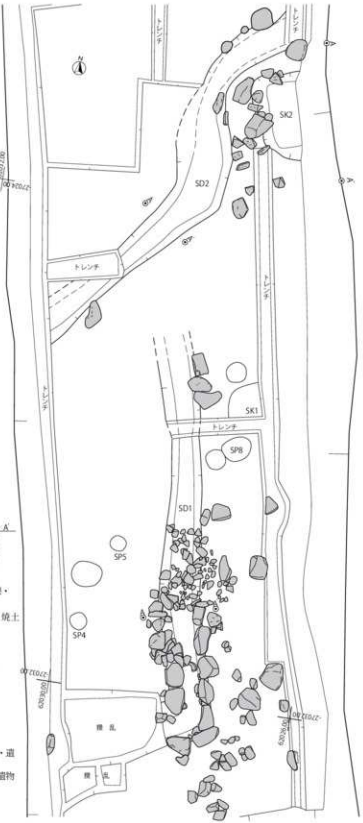


図14　ＳＤ１・２・ＳＫ２遺構実測図

0　S=1/60　2(m)　礫

性格不明遺構（ＳＸ１・２、図６・16）

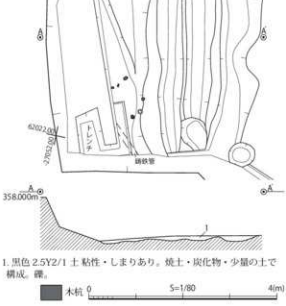
ＳＸ１は調査区東端にあり、南北に畝状の起伏が伸びでいる浅い落ち込みである。５次面の遺構で、覆土は粘性がやや低く炭化物を多く含む。敷地の裏手にあたることから農地である可能性がある。遺構南西隅には近代のものと考えられる鋳鉄管が確認され、主屋西側に位置する池から敷地西辺を南流する水路（セギ）へ排水するためのものと推測される。遺物は 17 世紀後半から 18 世紀前半の肥前系食膳具が主体で、京焼風陶器や格子叩きの肥前系陶器甕などがみられた。ＳＸ２は調査区南端に位置している。なだらかに南に下る遺構で、当初は遺構との認識はなかった。しかし木杭列が不整形に取り囲む状況が確認されたことから、池と関係する遺構と捉えた。覆土は締まりがなく炭化物や焼土を含む。出土遺物は破片のため図化していないが、18 世紀代の遺構とみられる。ＳＸ１・２は総体的に遺物の年代が旧いため、1759 年の火災以前の牧野家段階の遺構と考えられる。

出土遺物

出土遺物の総量は 45.618kgで（木製品を除く）、陶磁器 27,547.29g、土器 6,588.7g、瓦 11,186.1g、ガラス製品 272.55g、銭貨 23.6g である。土器はカワラケ・内耳鍋・涼炉、瓦は幕末以降の燻瓦が出土した。ガラス製品は近代の瓶などで、銭貨は 1636 ～ 1781 年に鋳造された「寛永通寶」一文銭である（表３）。木製品は水分を含むため計量はしなかったが、箸や漆器小片などが出土した（表２）。

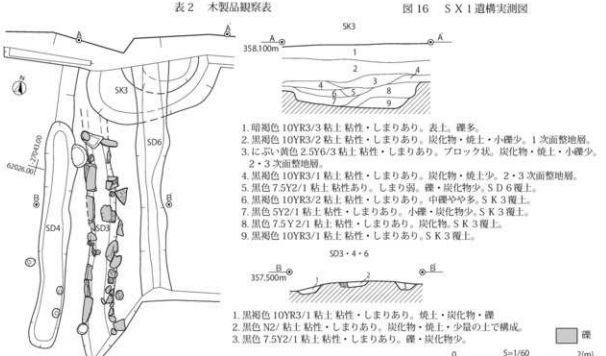
掲載No.	出土位置	器種	長さ(cm)	厚さ(cm)
木1	SD5	箸	26.92	0.73
木2	SD5	箸	(10.22)	0.56
木3	SE2	箸	(18.99)	0.63
木4	5検	箸	(5.57)	0.53

表２　木製品観察表



1. 黒色 2.5Y2/1 土 粘性・しまりあり。焼土・炭化物・少量の土で構成。礫。

図 16　ＳＸ１遺構実測図



1. 暗褐色 10YR3/3 粘土 粘性・しまりあり。表土。礫多。
2. 黒褐色 10YR3/2 粘土 粘性・しまりあり。炭化物・焼土・小礫少。1 次面整地層。
3. にぶい黄色 2.5Y6/3 粘土 粘性・しまりあり。ブロック状。炭化物・焼土・小礫少。2・3 次面整地層。
4. 黒褐色 10YR3/1 粘土 粘性・しまりあり。炭化物・焼土少。2・3 次面整地層。
5. 黒色 7.5Y2/1 粘土 粘性あり。しまり弱。礫・炭化物少。ＳＤ６覆土。
6. 黒褐色 10YR3/2 粘土 粘性・しまりあり。中礫やや多。ＳＫ３覆土。
7. 黒色 5Y2/1 粘土 粘性・しまりあり。小礫・炭化物少。ＳＫ３覆土。
8. 黒色 7.5Y 2/1 粘土 粘性・しまりあり。炭化物。ＳＫ３覆土。
9. 黒褐色 10YR3/1 粘土 粘性・しまりあり。ＳＫ３覆土。

1. 黒褐色 10YR3/1 粘土 粘性・しまりあり。焼土・炭化物・礫
2. 黒色 N2/ 粘土 粘性・しまりあり。炭化物・焼土・少量の土で構成。
3. 黒色 7.5Y2/1 粘土 粘性・しまりあり。礫・炭化物少。

図 15　SD3・4・6・SK3 遺構実測図

掲載№	出土位置	銭貨	寛永通寶	外径(mm)	内郭(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	背面	備　　考
銭1	1検	寛永通寶	寛永通寶	23.47	6.03	1.23	2.5	なし	一文銭ハ且,1668～1781年
銭2	2検埴土	寛永通寶	寛永通寶	24.59	6.08	1.31	3.2	なし	一文銭ハ且,1668～1781年
銭3	2検埴土	寛永通寶	寛永通寶	23.33	5.65	1.26	3.1	なし	一文銭ハ且,1668～1781年
銭4	2検東	不明	不明	23.51	6.32	1.64	2.9	不明	銭縁れ
銭5	2・3検	寛永通寶	寛永通寶	26.36	5.35	1.68	3.4	文	一文銭,折銀,1636～1659年
銭6	2検トレンチ	寛永通寶	寛永通寶	23.13	6.1	1.14	2.5	なし	一文銭ハ且,1668～1781年
銭7	排土	寛永通寶	寛永通寶	23.19	6.97	1.2	2.7	なし	一文銭ハ且,1668～1781年
銭8	排土	寛永通寶	寛永通寶	23.52	5.97	1.26	3.38	不明	一文銭ハ且,1668～1781年

表3　銭貨観察表

注目される遺物として暦茶碗(48)が挙げられる。2次面検出時に排土から発見されたため出土位置は不明だが、約半年分の暦が復元できるほど残されていた。暦茶碗は全国で約22例が東京都・石川・徳島・山口県などの城下町遺跡から出土している。長野県内では小県郡旧東部町にある上の原遺跡群上前橋遺跡B地点で口縁部小片が出土している以外は管見の限りみられない。幕末の随筆『耽奇漫録』には「歳玉茶碗」として筒形の暦茶碗が描かれているが、その用途は判然とせず、正月の茶席での初釜用、贈答用、富士講との関連などが想定されている（森本 2009a）。48は年号が欠損しているが年の干支は「辛未」と読める。近世で該当するのは1751（宝暦元）年と1811（文化8）年であるが、1811年は大寒の日付が異なるため、1751年の暦と判断した。器形の特徴と京焼の窯銘である「錦光山」からも18世紀第2～3四半期の製品と判断され、暦の年代と齟齬はない。宝暦への改元が寛延3年10月と遅く、現存する伊勢暦では「寛延四年」のままであるため、暦茶碗も同様に復元した。その他の部分も伊勢暦を参考にして復元案を示した。

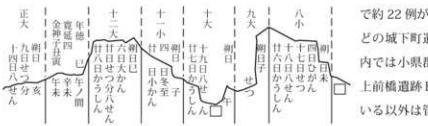


図17 暦推定復元図

第3節　総括

調査では幕末から近代にあたる1次面、佐藤家敷地となる1760（宝暦10）年から1799（寛政11）年の火災後までの2・3次面、牧野家敷地であった1759（宝暦9）年以前の5次面を検出した（図18）。調査区は牧野家段階では敷地の北部に該当するが、入口に近い東と敷地奥である西が低く、建物が建つ中央が高くなるという高低差がみられ、盛土による整地の可能性もある。遺構は中央東に2棟の礎石建物跡（ＳＳ４・５）、西に1棟（ＳＳ３）、中央と敷地奥との境である傾斜部分に南北方向に並列する3条の溝状遺構（ＳＤ３・４・６）、敷地奥に農地とみられる畝状遺構（ＳＸ１）、南に池に関連するとみられる木杭で囲まれた窪地（ＳＸ２）が検出された。調査区東では井戸跡（ＳＥ２）が確認された。1759年に屋敷が全焼した翌年、跡地の北半を佐藤家が与えられた。2次面ではその建物（ＳＳ１・２）が調査区西棟範囲に現れ、現在に通じる屋敷地の形成が始まる。その東に東西方向のＳＤ１、北西－南東軸のＳＤ２の石組溝が検出されたが、その性格は不明である。1788（天明8）年の河内屋火事、1799（寛政11）年の佐藤家火災とその度に整地が行われ、幕末以降の1次面では礎石とみられる礫が調査区西棟範囲に散乱していたが、既存建物の攪乱により建物跡は検出されなかった。2次面で検出したＳＥ１はその位置から幕末から現代まで残っていた井戸とみられ、出土遺物から1次面の遺構と判断した。

出土遺物の帰属時期は陶磁器の編年から、1次面の幕末以降、2・3次面の18世紀代、5次面の17世紀後半～18世紀中葉に区分した。17世紀後半から18世紀代の遺物について一定のまとまりがあると捉えられたため、陶磁器について産地比率は重量を、器種構成比率は重量と破片点数を用いて算出した。比較として同じ松代城下町跡の他地点のデータを提示した。松代病院地点はA区で18世紀後半～末葉である第Ⅲ検出面遺構について、

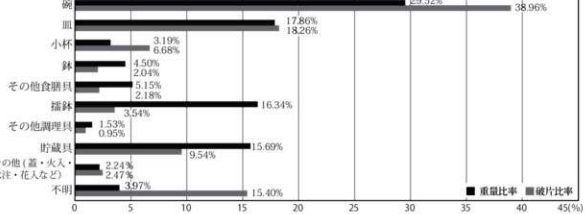
報告書掲載グラフから陶磁器以外を除去し再構成した。木町通り地点は、町人地で 1717（享保２）年の湯木・関口火事に伴う整地層に該当する、中木町のＢ７区２次面焼土下層～３次面焼土層、組屋町のＦ２区２次面の遺物を報告書のデータから抽出して重量比によるグラフを作成した。松代病院地点は上級武家地である殿町に位置し、グラフ化したＡ区は家老を輩出する家柄である真田家の敷地である。産地組成は本調査と同一傾向にある。木町通り地点の産地組成では京信楽系はみられず、同地点内の他の町人地でも京信楽系の出土量は極めて少ないことから、松代藩内における 18 世紀代の産地組成では京信楽系の多寡が階層差の指標であることが窺える。

江戸遺跡では大名屋敷の肥前系の組成比率は、18 世紀初頭の 70 ～ 80％から 18 世紀末葉には 45％に低下するが、京信楽系・瀬戸美濃系量産陶器の増加による影響とされる（江戸陶磁土器研究グループ 1996）。また関東の宿場や農村の遺跡でも同傾向にあり、18 世紀中葉以降の大名屋敷と町人地では遺物の内容に顕著な差異が認めにくいことが指摘されている（森本 2009b）。18 世紀の松代城下町跡でも基本的には江戸遺跡と同じ様相であるが、江戸遺跡のような産地の多様化はまだ現れず、肥前系主体の流通体系にある日本海側と交通・経済面で密接であることから、18 世紀末でも肥前系の比率は低下しないという特徴がある。

器種構成の分析からは、普遍的な器種である碗と比較しても皿や小杯が多用されていることがわかる。今回提示していないが、皿・小杯・猪口では肥前系の比率は約 95％と高く、碗は肥前系が約 47％、京信楽系が約 35％と拮抗している。いずれも量産品が多い。江戸大名屋敷では、肥前系磁器の皿・鉢等を正式な食膳具とし、京信楽系の碗などを日常的な場で使用することが指摘されているが（森本 2009C）、在藩中級藩士の屋敷である本地点でもその傾向が現れている。松代病院地点などの上級武家地ではこれに加えて肥前・京信楽系の高級品を少量含むが、木町通り地点では京信楽系の代替として瀬戸美濃・肥前系の量産陶器があり、京焼風陶器や御室碗などがその代表例と考えられ、松代城下町跡における陶磁器組成のもう一つの特徴となっている。

松代城下町跡では今まで町人地と上級武家地の調査が行われてきたが、今回初めて中級藩士の屋敷を調査した。屋敷地の利用形態の一端を解明することができ、18 世紀代を主としたまとまった資料が得られたことは成果である。今後松代藩内、その他の事例との比較検討をさらに深める必要があると考える。

松代城下町跡陶磁器産地組成比率（重量比・％）



陶磁器器種構成比率（重量・破片比）

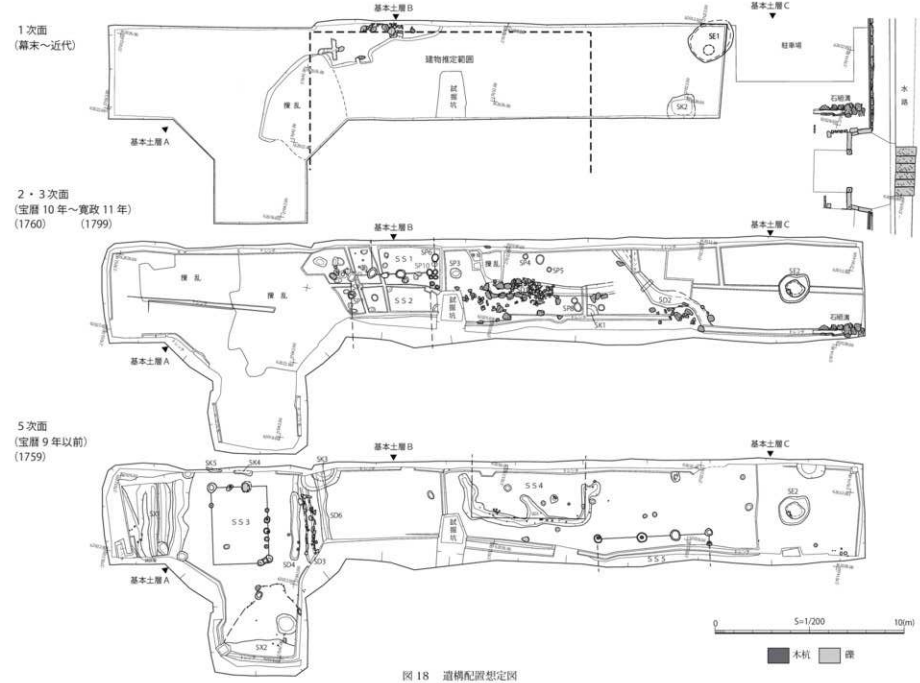

1次面
(幕末～近代)
基本土層B
基本土層C
基本土層A
建物推定範囲
試掘坑
探乱
SE1
SK2
駐車場
石組溝
水路
2・3次面
(宝暦10年～寛政11年)
(1760)　(1799)
SS1
SS2
SP1
SP2
SP3
SP4
SP5
SP6
SK1
SD2
SE1
5次面
(宝暦9年以前)
(1759)
SS3
SS4
SS5
SK3
SK4
SK5
SD3
SD4
SD6
SE2
0
S=1/200
10(m)
木杭
礫

図18　遺構配置想定図

表4　土器・陶磁器・瓦・ガラス製品観察表（1）

（）内は残存値，砂＝砂粒，石＝石英，長＝長石，角＝角閃石，雲＝雲母，赤＝赤色粒，橙＝橙色粒，白＝白色粒，黒＝黒色粒

掲載番号	遺構名	出土位置	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	重量(g)	残存率	色調(内/外)	胎土	釉薬	成整形の特徴	備考
1	表土		磁器染付	碗	8.2	3.0	4.8	110.8	5/6		白色精良,ガラス質,砂	人工コバルト(明),透明釉	成形不明,ゴム印,外松明・午申・草花文・七宝繋ぎ文,下端連弁文,高台脇圏線1,高台内圏線1	瀬戸美濃系,20C～,高台付着物
2	表土		白磁	皿	9.0	6.0	1.8	17.0	1/6		白色,精良,ガラス質,砂	透明釉	型成形	瀬戸美濃系,近代
3	表土		陶器	植木鉢	－	17.0	(7.9)	806.8	下～底		に赤い赤褐色粗,石,白	白化粧,白色釉(淡緑)	ロクロ成形,貫付挽り2,高台露胎,外側突帯2,見込トチ6	松代系,19C～
4	表土		白磁	蓋	長5.0	短2.8	1.7	16.4	6/6		白色,精良	透明釉	成形不明	産地・時期不明
5	表土		土器	壺か	長9.6	短6.8	厚2.3～1.3	200.3	6/6	黒褐	に赤い黄橙色,やや粗,雲,石,長,砂,橙		型成形,内面粘土貼付,把手抉り2方向	産地・時期不明,19C後～
6	表土	瓦	軒平瓦	瓦(10.8)	幅(14.3)	厚(1.7)	510.6	1/6	暗灰	灰白色,やや粗,橙,白			型成形,工具によるナデ,瓦当平瓦と接合,菊唐草文	産地・時期不明,幕末
7	SE1		磁器染付	小杯	7.9	3.3	4.5	43.9	2/6		灰白色,精良,ガラス質	呈彩(明),透明釉	ロクロ成形,蛇の目高台,高台内露胎,高台脇圏線,外側松・鶴文	瀬戸美濃系,19C
8	SK2		磁器染付	碗蓋	9.7	摘径3.8	2.8	39.9	2/6		灰白色,精良	呈彩(明),透明釉	ロクロ成形,撓み端部・貫付露胎,外軒丸内唐草文(短工)縦線文,見込圏線・渦文・「永楽年製」銘	肥前系,大橋V(1780～1860)
9	SK2		磁器染付	碗蓋	10.1	5.4	2.7	16.7	2/6		灰白色,精良	呈彩(やや明),透明釉	ロクロ成形,貫付露胎,外文様あり,内圏線内文子,高台内銘あり	肥前系,大橋V(1780～1860)
10	SK2		磁器染付	碗	8.0	3.0	4.7	36.3	2/6		灰白色,精良	呈彩(明),透明釉	ロクロ成形,貫付露胎,外側丸,見込文様あり	肥前系,大橋V(1780～1860)
11	SK2		磁器染付	小杯	5.5	2.2	2.4	11.7	3/6		灰白色,精良,ガラス質	人工コバルト,金彩,透明釉	型成形か,貫付露胎,高台内銘,高台脇染付櫛歯文,見込上絵,縦文・雪輪文	瀬戸美濃系,近代
12	SK2		磁器染付	小杯	5.4	－	(2.1)	4.7	口～胴2/6		灰白色,精良,ガラス質	人工コバルト,透明釉	型成形か,染付,見込上絵,蔦面状文・圏線・船・風景	瀬戸美濃系,近代
13	SK2		磁器染付	段重	10.9	9.2	5.2	270.0	3/6		灰白色,精良,ガラス質,砂	呈彩(濃),透明釉	型成形,口縁・底外縁露胎,外側竹文・蔦文	瀬戸美濃系,19C,縁疵,底外朱書
14	SK2		陶器	鉢缶	32.8	13.6	15.1	742.6	2/6		に赤い褐色,粗,白多	鉄釉(褐～に赤い赤褐)	ロクロ成形,貫付露胎,胴口1単位13条,施文後上部ナデ縦文	松代系,19C前半～
15	SK2		陶器	急須	9.4	11.7	(9.2)	95.8	1/6		浅黄色,精良		ロクロ成形,注口貫付,注口内孔,19,外突孔	常滑系,19C～,火計手
16	SK2		陶器	土瓶	7.6	8.6	10.3	189.7	2/6		に赤い黄橙色,やや密,白	鉄釉(黒,暗褐)	ロクロ成形,注口貫付,注口内孔3,外突孔,把手貫付,口縁～内～体下～底露胎	産地・時期不明
17	SK2		土器	涂炉	－	－	(4.0)	48.2	1/6	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色,雲,石,長,白		成形不明,外面文	産地・時期不明
18	SK2		土器	涂炉	－	－	(3.5)	38.5	1/6	に赤い橙	に赤い橙色,やや粗,雲,石,長,白		ロクロ整形,外面文	産地・時期不明
19	SK2		土器	涂炉	－	－	(10.0)	323.4	胴2/6	橙	橙色,やや粗,橙,白,赤		内ロクロナデ	産地・時期不明
20	SK2		瓦質土器	火鉢	－	－	(10.5)	238.1	胴1/6	黒	灰黄色,精良		内ナデ・ハケ,外鐵子面貼付・直線地・凸線・亀甲文	産地・時期不明
21	2検	堀内	陶器	碗	7.9	2.8	4.3	80.1	6/6		灰色,精良	白化粧,鉄釉,人工コバルト,透明釉	ロクロ成形,高台露胎,削出高台,外体下端焼び跡,上縁コバルト で圏線,篤草に「同治年」銘	産地不明,近代
22	1検	東	陶器	碗	10.7	3.6	6.7	130.9	4/6		に赤い黄橙色,やや粗	白化粧,鉄釉,透明釉	ロクロ成形,削出高台,高台露胎	瀬戸美濃系,9・10小期(1800～1850)
23	1検	東	陶器	碗	6.9	2.1	3.2	13.6	2/6		浅黄橙色,精良	灰釉(灰オリーブ),上絵(緑)	ロクロ成形,外側突	京焼系
24	1検	東	磁器染付	皿	10.3	6.0	2.3	91.5	5/6		白色,精良,ガラス質	人工コバルト(明青)	ロクロ成形,貫付露胎,胴版転写,内側松・梅,見込竹・鶴・寿字文	瀬戸美濃系,19C末～
25	1・2検		白磁	皿	長6.6)	短(6.5)	(1.7)	29.0	2/6		白色,精良	透明釉	型成形,高台貼付,貫付露胎,型紙痕	肥前系,年代不明
26	1検	東	白磁	皿	－	3.9	(2.5)	24.3	1/6		白色,精良	透明釉	ロクロ成形,高台露胎,蛇の目釉剥ぎ	肥前系,大橋IV(1650～1780)
27	1検	東	陶器	鉢缶	－	12.0	(5.3)	222.0	底2/6		赤褐色,精良,型微	鉄釉(暗赤褐色)	成形不明,口ロ整形,胴口1単位13本,櫛描き	肥前系,大橋V(18C後半～1868),内面摩滅,見込重ね焼痕,底部砂付着
28	1検	東	ガラス	瓶	4.6	5.1	4.3	37.4	3/6		白色不透明		型成形,スクリューキャップ,外側梅印形・列柱	昭和前期
29	1検		瓦	丸瓦	長29.0	幅14.8	厚1.5～3.4	1,312.6	5/6	暗灰	灰白色,植物遺体		型成形,内刷毛目,外ナデ	桶瓦,被熱
30	SD1		磁器染付	碗	8.9	3.5	4.1	55.3	4/6		灰白色,精良	呈彩(やや明),透明釉	ロクロ成形,外側草花文,高台側圏線3,貫付露胎	肥前系大橋IV(1690～1780),貫付砂付着
31	SD1		陶器	碗	9.3	3.8	7.0	75.1	2/6		灰白色,精良,型微	白化粧,鉄絵,呈彩,透明釉	ロクロ成形,外体下～高台露胎,外体下ハケ放射状に施文,施釉むら,松文	産地不明,江戸後期
32	SD1		陶器	碗	9.4	－	(5.5)	20.7	1/6		灰白色,精良	白色釉,鉄釉	ロクロ成形,口縁～内白色釉,外側鉄釉,沈線文・呈彩・白泥による文様	産地・時期不明

表４　土器・陶磁器・瓦・ガラス製品観察表（２）　　（）内は残存値、砂一砂粒、石一石英、長一長石、角一角閃石、雲一雲母、赤一赤色粒、橙一橙色粒、白一白色粒、黒一黒色粒

掲載番号	遺構名	出土位置	種類	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	重量(g)	残存率	色調(外/内)	胎土	釉薬	成形の特徴	備考
33	SD1		磁器染付	皿	9.2	4.8	2.3	13.3	1/6		灰白色,精良,やや軟質	呈須(やや暗),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,内印刊菊花文,見込圏線2,外側折松葉文	肥前系,大橋IV(1690～1780),被熱
34	SD1		陶器	瓶	－	4.0	(4.5)	60.6	底6/6		灰白色,精良,やや軟質	灰釉(淡緑色)	ロクロ成形,削出高台,内・外体下～高台露胎	瀬戸美濃系
35	SD1		磁器染付	水滴	長(5.4)	幅5.1	2.2	38.7	2/6		灰白色,精良	呈須(明),透明釉	タタラ成形,糸切,内面・外側露胎,底内外布目痕,上面波・沈線・蓮文	肥前系
36	SD1		土器	瓶口	長(15.1)	幅(11.4)	(5.5)	347.6	－		橙色,やや密,雲,砂,赤	内外ナデ痕作り	内外ナデ痕作り	産地不明,18C～19C中
37	SD2		陶器	碗	－	4.6	(2.7)	76.4	2/6		灰白色,精良,軟質	鉄釉(明赤褐)	ロクロ成形,削出高台,体下～畳付露胎	瀬戸美濃系,7・8小期(18C中～後半)
38	SD2		磁器染付	皿	14.0	8.4	3.2	27.4	1/6		灰白色,精良	呈須(やや暗),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,見込圏線2,高台圏線,外側線描唐草文,内側蓮,内,草花文	肥前系,大橋IV(1690～1780)
39	SP8		陶器	皿	10.0	4.0	2.5	16.8	1/6		灰白色,精良	鉄釉(暗赤灰)	ロクロ成形,外側下半ロクロケズリ,上端鉄釉,見込重ね焼き痕	産地・時期不明
40	2検	側内	磁器染付	碗	9.6	4.2	5.1	34.1	1/6		灰白色,精良	呈須(やや明),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,外側二重線口文,高台圏線2,高台内刻れた銘「福」,銘,内一重線付文,見込一重圏線内に菊花文	肥前系,大橋IV(1700～1750)
41	2検	焼土	磁器染付	碗	9.9	3.9	4.8	87.8	5/6		白色,精良,密	呈須(淡明),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,外側柱刃唐草文,濃み	肥前系,大橋IV(18C前)
42	2検	焼土	陶器	碗	9.8	－	(4.6)	21.5	1/6		灰白色,精良,密	灰釉(淡黄),鐵絵	ロクロ成形,外側鐵絵	京信楽系,18C後半～19C前,丸碗
43	2検	焼土	陶器	碗	9.7	3.2	5.3	35.2	2/6		灰白色,精良	灰釉(灰白,上絵(白,赤,黄)	ロクロ成形,削出高台,高台露胎,外側草花文,見込不明,丸碗	京信楽系,角谷窯(18C2/4～3/4),半球形丸碗
44	2検	焼土	陶器	碗	9.0	－	(4.6)	25.9	2/6		灰白色,精良,密	灰釉,色絵	ロクロ成形,外口縁雅文	京信楽系,角谷窯(18C2/4～3/4),半球形丸碗,被熱により変色
45	2検	焼土	陶器	碗	8.9	5.3	7.1	80.3	2/6		灰白色,精良,密	不明	ロクロ成形,削出高台	京信楽系,角谷窯(18C2/4～3/4),筒形碗,被熱により変色・釉剥離
46	2検	焼土	陶器	碗	9.5	－	(5.9)	59.4	2/6		灰白色,精良,堅緻	鐵絵,灰釉(灰白)	ロクロ成形,外側鐵絵松文・文字	京信楽系,角谷窯(18C2/4～3/4),筒形碗,被熱
47	2検	焼土上	陶器	碗	11.0	－	(6.5)	78.0	2/6		灰白色,精良,堅緻	鐵絵,透明釉,白色釉	ロクロ成形,外側梅枝文,柴垣文	京信楽系,角谷窯(18C2/4～3/4)
48	2検	掃上	陶器	碗	9.2	4.6	7.0	84.8	2/6		淡黄色,精良,やや軟質	透明釉,上絵,赤・灰色	ロクロ成形,削出高台,高台露胎,外側上絵見込上絵,高台内「銀光山」印銘	京焼,18C前半,唐茶碗
49	2検	焼土	陶器	碗	8.9	3.9	7.3	147.2	4/6		淡黄色,精良,密,やや軟質	赤色釉(に.ぶい赤褐),灰釉(淡黄)	ロクロ成形,削出高台,外体下～底露胎	京信楽系,18C中,被熱により変色
50	2検	焼土	磁器染付	小杯	8.1	3.5	5.5	96.6	5/6		白色,精良,密,ガラス質	呈須(淡明),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,外側風景文,高台圏線2,見込,文様あり	肥前系,大橋IV(1650～1740)
51	2検	焼土上	磁器染付	皿	13.4	7.2	3.6	108.5	4/6		灰白色,精良,密	呈須(暗),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,外側唐草文,高台圏線1,内側濃み地に捻き消として白抜き蔵,見込五弁花コンニャク印刊,高台内圏線1	肥前系,大橋IV(17C末～18C初)
52	2検	包含層	磁器染付	皿	13.3	－	(2.3)	26.1	2/6		白色,精良	呈須(暗),透明釉	ロクロ成形,外側唐草文,内口縁圏線,内側文様濃み	肥前系,大橋IV(1690～1710)
53	2検	焼土	磁器染付	皿	13.7	8.4	3.0	33.8	2/6		白色,精良,密	呈須(暗),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,口縁,外側唐草文(縁描濃み),・圏線1,高台(縁圏線2,内側菊水文(縁描濃み),口縁下圏線,見込圏線2,高台内圏線1	肥前系,大橋皿VI(1650～1710)
54	2検	焼土	磁器染付	皿	13.0	7.1	3.9	63.3	2/6		灰白色,精良,密,ガラス質	呈須(暗),透明釉	ロクロ成形,高台露胎,外側唐草文・圏線3,内側濃み・草花文か,見込圏線2,高台内圏線1	肥前系,大橋皿IV(1650～1740),砂付着
55	2・3検	東	青磁染付	皿	10.4	7.2	1.8	77.5	4/6		白色,精良	呈須(濃青),青磁(明緑灰)	ロクロ成形,蛇の目凹形高台,外側唐草文,高台圏線2,内側青蓮,見込二重圏線内宝文	肥前系,大橋IV(1740～1860),高台重ね焼痕
56	2検	焼土上	陶器	皿	－	3.7	(2.1)	82.6	底6/6		に.ぶい褐色,精良	透明釉,白色釉	ロクロ成形,削出高台,見込・高台露胎	肥前系,大橋IV(1690～1780)
57	2検	焼土	陶器	皿	7.8	5.5	2.0	36.3	4/6		灰白色,やや粗,砂,赤	鉄釉(黒褐)	ロクロ成形,ロクロケズリ,底回転ケズリ,外側鉄釉	産地・時期不明,被熱,スス付着
58	2検	焼土	磁器染付	猪口	7.4	4.1	5.3	99.8	5/6		白色,精良,密,ガラス質	呈須(やや明),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,胴部,外側草花文・圏線2	肥前系,大橋皿IV(1650～1740),豊付砂付着
59	2検	焼土	磁器染付	猪口	6.8	3.8	5.2	37.2	2/6		灰白色,精良,ガラス質	呈須(暗),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,外下端圏線3・口縁面降文	肥前系,大橋皿IV(1650～1740),豊付砂付着
60	2検	焼土上	白磁	猪口	7.0	3.8	5.4	42.5	4/6		白色,精良,密	透明釉	ロクロ成形,型付露胎	肥前系,大橋皿(1650～1690)

表4　土器・陶磁器・瓦・ガラス製品観察表（3）　　（）内は残存値，砂一砂粒，石一石英，長一長石，角一角閃石，雲一雲母，赤一赤色粒，橙一橙色粒，白一白色粒，黒一黒色粒

掲載番号	遺構名	出土位置	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	重量(g)	残存率	色調(内/外)	胎土	釉薬	成形部の特徴	備考
61	2検	東	陶器	鉢	－	6.4	(4.8)	140.9	2/6		灰白色,やや粗,長砂	透明釉,棒釉(暗赤褐)	ロクロ成形,高台張り,見込ビン編3	瀬戸美濃系
62	2検	焼土	陶器	鉢鉢	35.0	－	11.3	439.9	1/6		黒褐色,精良,密	鉄釉(黒褐)	成形不明,ロクロ整形,外面ロクロケズリ,指付糸切	肥前系,相田Ⅰ-C類(18C後～19C初)
63	2検	焼土	陶器	鉢鉢	－	16.6	(4.1)	134.9	1/6		赤褐色,精良,やや密,砂	鉄釉	成形不明,ロクロ整形,外面ロクロケズリ,指付糸切	肥前系,相田Ⅰ-C類(18C後～19C初),見込トチ痕2
64	2検	西	磁器	紅皿	4.3	1.2	1.4	3.8	3/6		白色,精良	透明釉	貫通型押成形,外体～底露胎	肥前系,大橋Ⅳ(1690～1780),B類
65	2・3検	東	陶器	小碗	長5.8	短3.0	2.6	32.7	6/6		灰黄色	灰釉(灰白)	手捻ロ成形,台土外反擬宝,底露胎	産地・時期不明
66	2検	包含層	白磁	入形	長6.2	短2.1	3.7	34.7	6/6		白色,精良	透明釉	成形不明,底部印象切痕	産地・時期不明
67	2検		土器	皿	13.6	4.2	2.6	21.8	2/6	にぶい橙	にぶい橙色,粗,砂,赤		ロクロ成形,回転糸切	在地
68	SD3		磁器染付	碗	9.8	－	(4.8)	20.7	2/6		灰白色,精良	呉須(明),透明釉	ロクロ成形,外側型紙摺り・濃み・桐葉文・圏線1	肥前系,大橋Ⅳ(1690～1740)
69	SD3		磁器染付	鉢蓋	8.0	摘径1.2	3.0	19.0	1/6		灰白色,精良	呉須(明),透明釉	ロクロ成形,ボタン状摘み,内口～体中位露胎,外濃み・菊唐草文か,口唇アルミナ塗布	肥前系,大橋Ⅳ(1740～1780),被熱
70	SD5		磁器染付	碗	－	4.1	(2.3)	30.7	2/6		灰白色,精良	呉須,透明釉	ロクロ成形,型付露胎,高台輪圏線2,高台内圏線内「大明成化年製」銘	肥前系,大橋Ⅲ(1670～1690)
71	SD5		磁器染付	碗	10.2	4.2	5.8	42.5	2/6		灰白色,精良,やや粗,砂	呉須(濃),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,外側松・石,高台輪圏線2,高台内圏線内「大明成化年製」銘	肥前系,大橋Ⅲ(1650～1690)
72	SD5		磁器染付	小杯	7.0	2.7	4.4	30.1	2/6		灰白色,精良	呉須(明),透明釉(やや青)	ロクロ成形,体下圏線1,高台輪圏線2,外側文様あり	肥前系,大橋Ⅳ(1700～1780),型付紋付碗
73	SD5		陶器	碗	9.2	4.1	5.0	66.4	3/6		灰白色,精良	灰釉(浅黄),鉄絵(オリーブ褐)	ロクロ成形,体下～高台部巾,体下～高台露胎,見込蛇目凸状	肥前系,大橋Ⅳ(18C初),朋出庵圏跡,京焼風
74	SD5		磁器染付	皿	9.6	5.4	1.5	15.8	1/6		灰白色,精良	呉須(やや明),鉄釉,透明釉	ロクロ成形,高台内圏線2,見込唐草文・丸文江戸紅	肥前系,大橋Ⅲ(1650～1780)
75	SD5		磁器染付	猪口	6.2	－	(3.3)	4.6	1/6		灰白色,精良	呉須(やや明),透明釉	ロクロ成形,外面濃文	肥前系,大橋Ⅳ(1700～1740),被熱
76	SD5		磁器染付	瓶	－	－	(3.2)	4.7	1/6		灰白色,精良	呉須(やや濃),透明釉	ロクロ成形,内面釉	肥前系
77	SD6		陶器	碗	8.2	－	(4.0)	9.3	1/6		灰白色,精良,やや軟質	灰釉(灰白),上絵(緑,赤)	ロクロ成形,上絵付草花文	京信楽系,角谷器(2/4～3/4),平球形丸碗
78	SD6		磁器染付	壺	6.0	－	(3.5)	13.9	口～頸2/6		灰白色,精良	呉須(やや濃),透明釉	ロクロ成形,口縁露胎,外口縁～頸部圏線4・濃み	肥前系,大橋Ⅳ(1700～1780)
79	SD6		陶器	鉢蓋口	4.8	3.9	2.5	35.8	肥手欠		にぶい黄色	灰釉	ロクロ成形,外底露胎,回転糸切,肥手貼付	瀬戸美濃系,18C～19C初半
80	SE2		磁器染付	碗	－	4.5	(3.2)	65.0	底4/6		灰白色,精良	呉須(明),透明釉	ロクロ成形,高台内圏線,高台輪圏線2,外側風景文・東屋文	肥前系,大橋Ⅳ(1690～1780),高台内紋付碗
81	SK3		磁器染付	蓋	4.8	－	0.9	9.9	3/6		灰白色,精良	呉須(やや濃),透明釉	ロクロ成形,口縁内露胎,外水製文	肥前系
82	SK4		磁器染付	碗	11.0	4.5	6.6	88.2	2/6		灰白色,精良	呉須(明),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,高台内圏線,高台輪圏線2,外側蓋文	肥前系,大橋Ⅳ(1700～1740),被熱
83	SX1		磁器染付	小杯	6.8	3.4	4.7	49.0	6/6		白色,精良	呉須(青),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,高台輪圏線2,外側変形子文	肥前系,大橋Ⅳ(1650～1740)
84	SX1		磁器染付	小杯	7.2	3.6	5.0	34.1	3/6		白色,精良	呉須(明),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,外側横線・菱編状線・点線文	肥前系,大橋Ⅳ(1650～1740),被熱,型付付碗
85	SX1		白磁	小杯	7.0		(3.2)	9.5	1/6		白色,精良	透明釉	ロクロ成形,外側浮彫による紅葉文	肥前系,大橋Ⅳ(1650～1740)
86	SX1		磁器染付	皿	－	7.8	(1.4)	58.7	底3/6		白色,精良	呉須(やや明),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,高台内圏線,高台輪圏線見込蛇文	肥前系,大橋Ⅲ(1650～1690)
87	SX1		磁器染付	皿	7.8	4.7	1.6	32.8	4/6		白色,精良	呉須(明),透明釉	ロクロ成形,型付露胎,高台内圏線,高台輪圏線3,外側梅文,見込牡丹唐草文・濃み	肥前系,大橋Ⅳ(1690～1740)
88	SX1		陶器	皿	12.3	－	(4.5)	14.5	1/6		灰白色,精良	鐵絵,透明釉	ロクロ成形,見込文様	肥前系,大橋Ⅳ(1650～1750)
89	SX1		陶器	皿	12.1	5.4	4.3	111.3	3/6		灰白色,精良	呉須(明),透明釉	ロクロ成形,高台内銘「清水」,見込蛇籠,山水文	肥前系,大橋Ⅲ(1650～1690),京焼風,被熱
90	SX1		磁器染付	蓋	8.0	－	(1.6)	8.1	1/6		白色,精良	呉須(明),透明釉	ロクロ成形,外圏線・一重圏目文	肥前系,大橋Ⅲ(1650～1690),被熱
91	SX1		陶器	鉢	22.0	－	(7.6)	133.8	2/6		褐灰色,密	白化粧,透明釉	ロクロ成形,口縁折返外,ヒロクロナデ・ドロクロケズリ,白化粧刷毛目文	肥前系,大橋Ⅳ(1690～1750)
92	SX1		青磁	瓶	11.1	－	(9.7)	206.8	口～頸4/6		灰色,やや精良	青磁(被熱により変色)	ロクロ成形	肥前系,大橋Ⅲ(1650～1750),被熱
93	SX1		青磁	瓶	9.4	－	(3.3)	27.8	口2/6		灰白色,精良	青磁(オリーブ褐)	ロクロ成形,ラッパ状口縁	肥前系,大橋Ⅲ(1650～1750),被熱

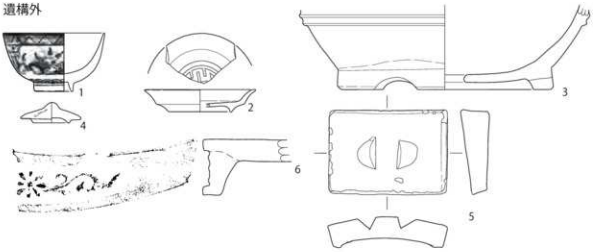
表４　土器・陶磁器・瓦・ガラス製品観察表（４）

（）内は残存値、砂＝砂粒、石＝石英、長＝長石、角＝角閃石、雲＝雲母、赤＝赤色粒、橙＝橙色粒、白＝白色粒、黒＝黒色粒

掲載番号	遺構名	出土位置	種類	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	重量(g)	残存率	色調(内/外)	胎土	釉薬	成形形の特徴	備考
94	SX1		青磁	瓶	－	7.4	(2.2)	19.8	底1/6		白色,精良,ややガラス質	青磁(オリーブ灰)	ロクロ成形,貫付露胎	肥前系,大橋Ⅲ/(1650～1750),底熱
95	SX1		陶器	甕	－	14.6	－	223.1	底1/6		灰色,やや粗,白	鉄釉	叩き成形,内外格子目,内露胎	肥前系,17C後半～18C代
96	SX1		青磁	火入	7.4	－	(3.1)	16.8	1/6		白色,精良,ガラス質	青磁(明オリーブ灰)	ロクロ成形	肥前系,底熱
97	5検	焼土上	磁器染付	碗	9.3	－	(5.3)	16.6	1/6		白色,精良	呉須(濃),透明釉	丸底,口縁下側線1	肥前系,大橋Ⅳ/(18C前)
98	5検	SD1下	青磁染付	碗	11.6	4.7	6.8	165.5	3/6		灰白色,精良	呉須(濃),青磁(明緑灰),透明釉	ロクロ成形,貫付露胎,アルミナ津在,外青磁・体下端,内見込二重圏線内子孫五弁花・口縁内四方襷文,高台内銘,二重角「四江」か	肥前系,大橋Ⅳ/(1750～1780)
99	5検	SD1下	陶器	碗	9.0	－	(4.8)	13.2	1/6		淡黄色,精良,軟質	透明釉,上絵(金,銀,緑,黒)	ロクロ成形,外側上絵草花文	京焼系,角谷Ⅲ(2/4～3/4),半球形碗
100	5検	SD1下	陶器	碗	10.7	－	(4.3)	18.3	1/6		灰白色,精良	鉄絵(黒),透明釉	ロクロ成形,外側鉄絵	京焼系,角谷Ⅲ(2/4～3/4),半筒形碗
101	5検	主層位含層	磁器染付	皿	－	7.8	(2.0)	40.3	1/6		白色,精良	呉須(明),透明釉	ロクロ成形,貫付露胎,外側畳掛き,高台輪圏線3,見込圏線2,高台内銘圏線内「大明成化年製」,ハリ支元痕4	肥前系,大橋Ⅲ(1650～1690)
102	5検	主層位含層	磁器染付	皿	10.2	6.4	1.7	49.5	4/6		白色,精良	呉須(やや明),透明釉	ロクロ成形,貫付露胎,口縁,外側呉須,高台輪圏線1,見込圏線2,唐草文(輪郭線・濃み),丸文に菊・葉),高台内銘圏線内「大明年製」	肥前系,大橋Ⅳ(1690～1780)
103	5検	中	磁器染付	鉢蓋	7.0	摘径1.0	2.6	10.1	1/6		白色,精良	呉須(淡),透明釉	ロクロ成形,外側圏線,桐文,型紙摺,内下端露胎	肥前系,大橋Ⅳ(1690～1740)
104	5検		磁器染付	段重	14.5	15.0(高台径)9.9	4.7	128.0	2/6		白色,精良	呉須,透明釉	ロクロ成形,口縁・底外周露胎,外側胜升文	肥前系,大橋Ⅳ Ⅴ(18C後～1860)
105	3～5検		陶器	鉢鉢	33.4	－	(5.1)	29.4	1/6		褐灰色,精良,堅微	鉄釉	ロクロ成形,玉縁状口縁,口縁下段,胴目柳葉,口縁強釉	肥前系,相羽H-1(1690～1740)
106	5検	焼土	陶器	鉢鉢	39.0	－	(9.8)	231.4	1/6		にぶい橙色,堅微	鉄釉(黒褐)	平底成形,口縁折返し,外上ロクロナデ・ドロクロケズリ,内胴目1単位16本・上端ナデ消し	肥前系,相羽Ⅰ～C類(18C後～19C初)
107	5検	主層位含層	磁器染付	瓶	－	－	(4.6)	21.7	4/6		白色,精良	鉄絵,透明釉,上絵(青)	ロクロ成形,内露胎,体外山文	産地・時期不明
108	5検	SD1下	陶器	向付	5.8	4.3	6.7	42.2	底6/6		灰白色,精良,堅緻	鉄絵,透明釉	ロクロ成形,底露胎,外側鉄絵	京焼系,角谷Ⅲ(2/4～3/4)
109	5検	SD1下	陶器	徳利	－	－	(12.3)	130.7	2/6		赤褐色,精良	鉄釉(暗赤灰)	ロクロ成形,肩張形,体外窪み,内露胎	瀬戸系,東岡近世3期(17C4/4～18C初),糸目徳利
110	5検	SD1下	陶器	徳利	－	5.5	(7.4)	24.7	1/6		灰黄色,精良,堅緻	透明釉,上絵(白,金)	ロクロ成形,底露胎,外側上絵唐文,内鉄釉	京焼系,角谷Ⅲ(2/4～3/4)
111	5検	SD1下	陶器	花入	－	4.4	(9.7)	53.1	底4/6		淡黄色,精良	透明釉,上絵(赤)不明	ロクロ成形,底露胎,外側上絵	京焼系,底熱により上絵退色
112	5検	SD1下	陶器	火入	9.0	－	(5.4)	44.1	胴1/2/6		灰白色,精良,やや硬質	透明釉,上絵(黒,緑,青)	成形不明,内露胎,外側上絵草花文	京焼系,底熱
113	3～5検		上層	内耳鍋	(34.0)	－	(5.8)	112.3	1/6	内:にぶい橙,外:にぶい褐色,やや粗,雲,石,角,赤,白	にぶい褐色,やや粗,雲,石,粒/灰褐	鉄釉,透明釉	粘土紐巻上成形,ロクロ整形,内耳貼付	在地,外面スス付着
114	5検	西側西	磁器染付	おはじき	縁2.0	縁2.0	0.4	2.8	6/6		白色,精良	呉須,透明釉	外周打ち欠き	肥前系
115	トレンチ	2検	磁器染付	碗	11.0	－	(4.7)	16.6	1/6		白色,精良,ややガラス質	呉須(淡明),透明釉	ロクロ成形,外側一重圏目文・宝文	肥前系,大橋Ⅲ(1650～1690)
116	トレンチ	2検西北壁	磁器染付	碗	－	5.1	4.0	69.3	3/6		白色,精良	呉須(やや明),透明釉	ロクロ成形,貫付露胎,外側草花文,高台輪圏線2,高台内銘圏線内銘「大明年製」	肥前系,大橋Ⅳ(18C2/4～1780)
117	トレンチ	2検西補北壁	陶器	碗	－	5.5	3.5	60.8	2/6		灰黄色,精良,密	灰釉(灰白)	ロクロ成形,削出高台,高台露胎,高台内目銘「芝」	肥前系,大橋Ⅲ Ⅳ(1650～1740),京焼風
118	トレンチ	2検	陶器	碗	－	5.6	(2.6)	34.6	体下～底2/6		灰白色,精良,密	透明釉	ロクロ成形,削出高台,高台内印銘「清水」	肥前系,大橋Ⅲ(17C後～18C初),京焼風
119	トレンチ	1検西	陶器	小杯	(7.2)	(4.5)	2.4	5.6	1/6		灰白色	灰釉(淡緑)	ロクロ成形,削出高台,高台露胎	産地・時期不明
120	トレンチ	5検東	色絵磁器	皿	－	4.2	(1.7)	23.5	底3/6		白色,精良	呉須,透明釉,上絵(赤,黒)	ロクロ成形,貫付露胎,外文様有り,見込上絵梅花文	肥前系,18C代か
121	トレンチ	東壁	陶器	上施盃	口7.2	高り径5.0	1.9	43.0	6/6		灰白色,砂	柿釉	ロクロ成形,外側横沈線,底状抽み,内露胎	肥知10C2/4～3/4,内角印銘「ダチやま喜」,糸目上施
122	トレンチ	5検西補北壁	陶器	甕	22.0	－	(4.5)	68.3	1/6		浅黄色,やや粗,石,砂,白	鉄釉(黒褐),透明釉	ロクロ整形,口外～体内透明釉,体外鉄釉	肥前系,大橋Ⅲ(1650～1690)
123	トレンチ	東壁	上層	内耳鍋	(37.4)	32.2	5.6	105.5	1/6	黒褐	にぶい橙色,粗,雲,石,粒,白		粘土紐巻上成形,ロクロ整形,内耳貼付,体外下端ケズり,底外砂目	在地,内外スス
124	表土		ガラス	瓶	1.6	最大幅5.3	高8.3,厚1.2	32.3	6/6	透明			型成形,偏角,気泡,円・星	産地不明,近代

表土

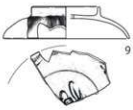
遺構外

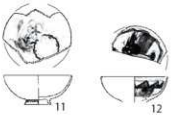


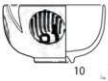
1次面（1）

SE1

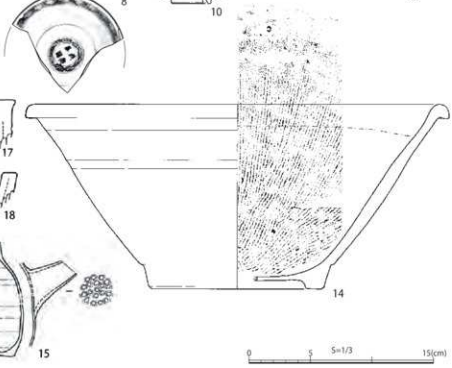
SK2（1）







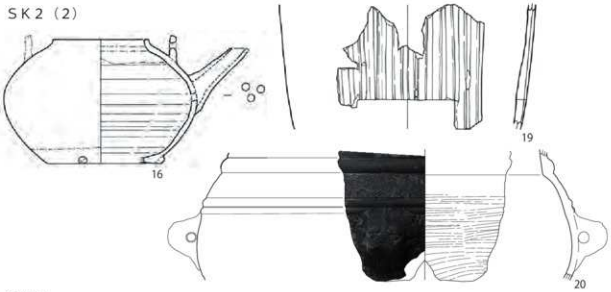
塀覆土



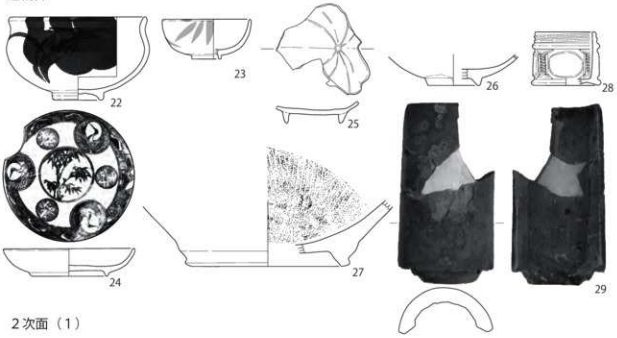
図版２

１次面（２）

ＳＫ２（２）

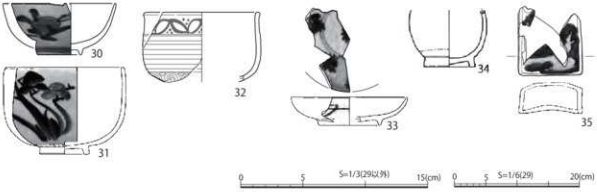


遺構外



２次面（１）

ＳＤ１（１）



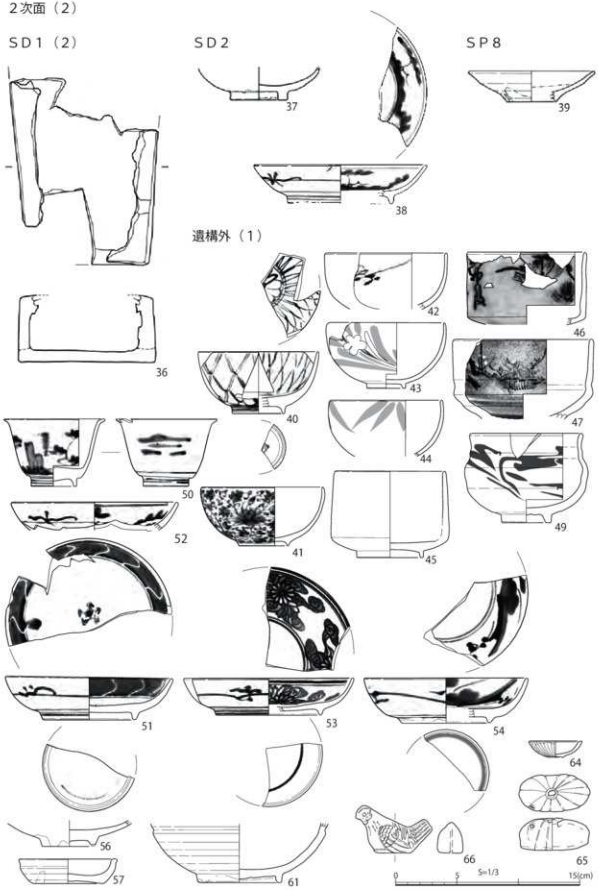
2次面（2）

SD1（2）

SD2

SP8

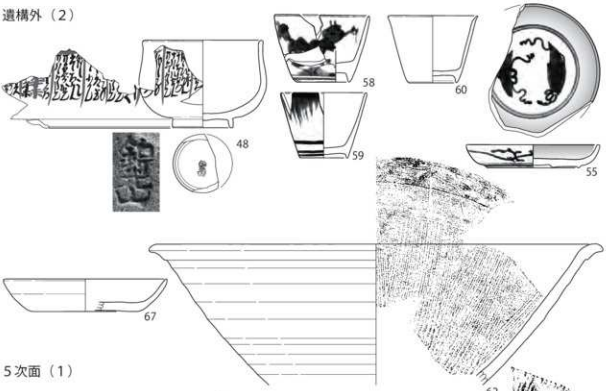
遺構外（1）



図版４

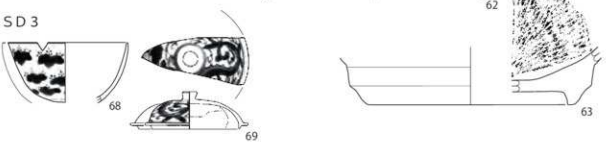
２次面（３）

遺構外（２）

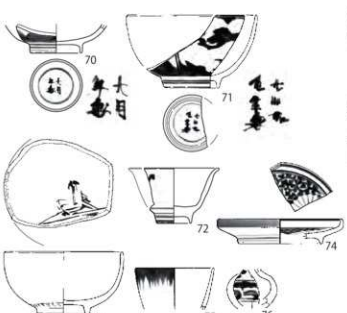


５次面（１）

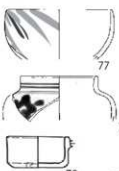
ＳＤ３



ＳＤ５

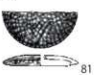


ＳＤ６

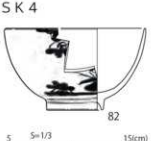


ＳＥ２

ＳＫ３

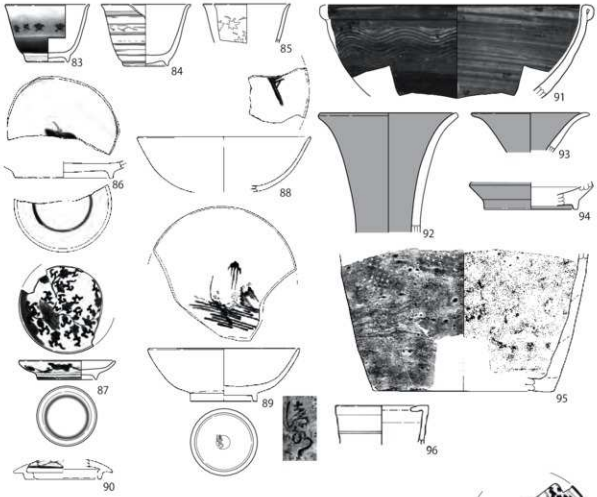


ＳＫ４

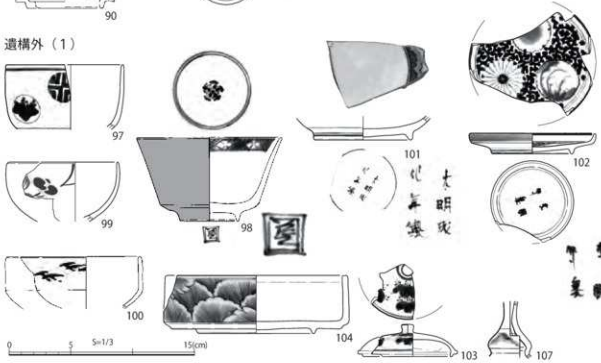


５次面（２）

ＳＸ１



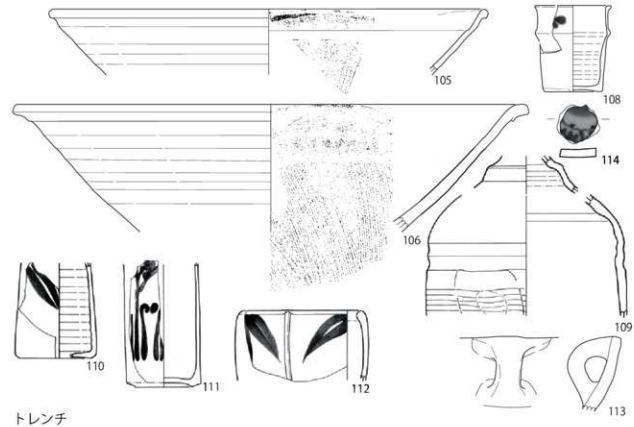
遺構外（１）



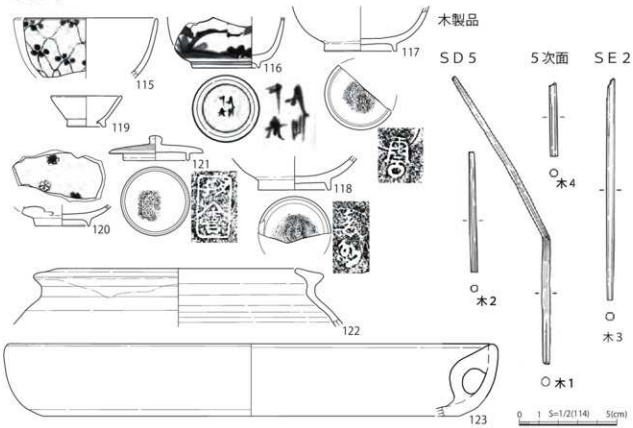
図版６

５次面（３）

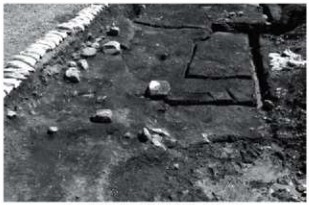
遺構外（２）



トレンチ



調査区全景（上が北）



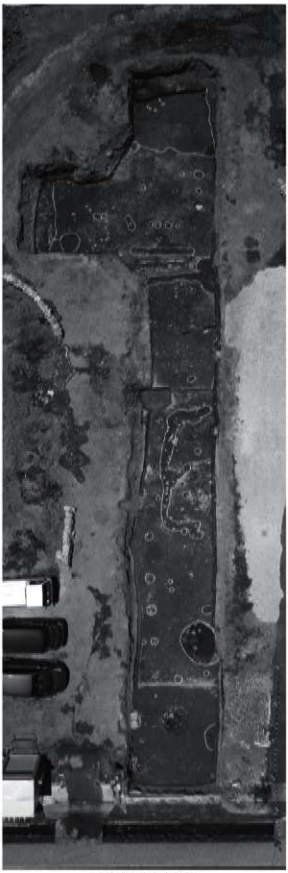
調査区中央１次面検出状況（西から）

調査区中央２次面完掘状況（南から）

調査区中央３次面完掘状況（南から）

石組溝完掘状況（北から）

図版8

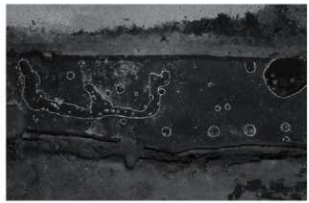


5次面全景（上が西）

5次面西部全景（上が西）

5次面中央全景（上が西）

５次面東部全景（上が西）



４・５号建物跡完掘状況（上が北）

ＳＤ３・４・６・ＳＫ３完掘状況（北西から）

ＳＥ１・２完掘状況（北西から）

ＳＫ2 遺物出土状況（北から）

ＳＸ１完掘状況（北東から）

ＳＸ２完掘状況（南から）

図版10

3

6

4

11

21

5

12

18

17

14

19

23

15

16

22

26

27

32

33

34

37

42

36

43

44

49

53

45

56

57

64

46

60

63

47

65

66

77

48

73

図版 12

89

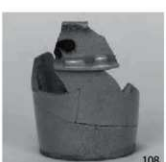
95

99

92

105

106


108

110

111

112

109

117

118

119

122

123

124

121

銭 1

銭 2

銭 3

銭 4

銭 5

銭 6

銭 7

銭 8

報告書抄録

ふりがな	まつしろじょうかまちあと（5）～だいかんちょう～
書　　名	松代城下町跡（5）～代官町～
副 書 名	グリンガルテン代官町分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第166集
編 著 者 名	飯島哲也　田中暁穂
編 集 機 関	長野市教育委員会長野市埋蔵文化財センター
所　在　地	〒381-2212　長野県長野市小島田町 1414 番地　TEL026-284-0004・FAX026-284-0106
発行年月日	2022（令和4）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
まつしろじょうかまちあと 松代城下町跡	ながのしまつしろまちまつしろ 長野市松代町松代 あざだいかんちょう 字代官町1452番 いちぶ　ほか 1一部　外	20201	F－033	36° 33′ 31″	138° 11′ 53″	20200409 ～ 20200601	210㎡	宅地造成

ふりがな 所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物
まつしろじょうかまちあと 松代城下町跡	集落跡	近世後期	礎石建物跡5棟、溝跡6条、井戸跡1基、土坑4基、小穴、性格不明遺構2基	陶磁器、木製品（箸・漆器）、金属製品（銭貨）
		幕末～近代	井戸跡1基、石組溝1条、土坑1基、小穴	陶磁器、瓦、金属製品（銭貨）、ガラス製品

要　　約

松代城下町跡は松代藩の城下町の範囲であり、調査地は主に中級藩士が集住する代官町に所在する。牧野伊左衛門の屋敷地であったが、1759（宝暦9）年の火災で全焼し、翌年には跡地北部を郡代官である佐藤軍治が拝領した。その後、1788・1799・1872年に火災の記録があり、調査で火災に伴う焼土層や整地層が確認された。遺跡は18世紀を主体とし、建物跡や井戸跡、畝状遺構などが検出された。陶磁器は量産品を主体とし、18世紀代では肥前磁器・京信楽系陶器が目立つ組成であり、在藩の中級藩士の屋敷においても江戸武家屋敷地と同一傾向であることが確認された。相違点は松代城下町跡では産地の多様化がみられず、肥前系陶磁器流通圏である日本海域に接するために肥前系の比率が高いことである。注目すべき遺物は1751（宝暦元）年の暦茶碗で、「錦光山」の銘から京焼であることも判明した。暦茶碗としては県内2例目となった。

長野市の埋蔵文化財第 166 集

松代城下町跡（5）～代官町～

令和 4 年 3 月 31 日印刷・発行

発行　長野市教育委員会
編集　長野市埋蔵文化財センター
印刷　信毎書籍印刷株式会社